

コミュニアルリビング（共同生活）の
現代的意義

2020年12月

齋藤 徹

論文要旨

コミュニナルリビング（共同生活）の現代的意義について

本論テーマは、コミュニナルリビングの現代意義に関してである。コミュニナルリビングとは、いわゆる血縁、婚姻などの繋がりにより親密圏を形成する家族や親族、もしくは居住の物理的近隣性による村落、集落などとは異なる、「特定の理由に基づき集った人々がともに暮らすあり方」のことを指す。

コミュニナルリビングをテーマとして取り上げた理由は以下の通りである。家族・コミュニティに象徴されるゲマインシャフト機能、行政や自治体による社会保障制度に象徴されるゲゼルシャフト機能が、共に低下を示す現代において、近代社会の初期からさまざまな形で現れて来た来歴の異なる人々が共に暮らすコミュニナルリビングの歴史的系譜とその生活実態を調べる中で、新しい親密圏を形成するあり方を考えるためのヒントを得ようとするものである。

本論の構成は全4章である。第1章は、コミュニナルリビングを、非実在の「ユートピア（空想）型コミュニナルリビング」と実在の「実践的コミュニナルリビング」に分け、さらに後者を「宗教型」「社会改良型」「スピリチュアル型」「コハウジング型」「シニア型」に分類し、欧米における各々のコミュニナルリビングタイプの系譜と概要について記述している。

第2章では、社会改良型コミュニナルリビングの始祖であるロバート・オウエンの「ニューハーモニー」を取り上げ、オウエンがいかにこのコ

ミュナルリビングを構想するかに至ったか、加えて、そこに含まれる平等という思想を、当時の市民社会の萌芽とルソー『社会契約論』との関連において考察した。

第3章は、日本におけるミュナルリビングの系譜を明治期から現在に至るまで辿り、欧米におけるミュナルリビングのタイプとの差異について考察した。そして、欧米とは異なる日本的ミュナルリビングのタイプとして「ケア型ミュナルリビング」があることを指摘した。

第4章は、以上のミュナルリビングの諸類型の歴史から学び取れる現代的意義は何かについて考察している。各ミュナルリビングに共通する特徴として、平等、共同（精神的共同・合理的共同）、禁欲の3点を指摘し、主流となる価値集団からの離脱とオルタナティブな価値集団への帰属を行った集団がミュナルリビングであると整理した。加えて、ミュナルリビング間の異なるポイントとしては、それぞれの共同内容に強弱があること、そして時代とともに規範性がゆるやかになる傾向があることを指摘した。

最後にミュナルリビングの課題として一般性と永続性の獲得を挙げ、それを解消するためのキーワードとして食と宗教倫理性の2点を挙げている。

目 次

序章	7
0-1. はじめに	7
0-2. 「コミユナルリビング（共同生活）」を取り上げる理由	9
0-3. 共同体（ゲマインシャフト）の揺らぎ	10
0-4. 社会保障制度の機能低下（ゲゼルシャフトの揺らぎ）	12
0-5. コミュナルリビング（共同生活）への着目	13
第1章 コミュナルリビング（共同生活）の定義と歴史推移	14
1-1. コミュナルリビング（共同生活）とは	14
1-2. ユートピア（空想）型コミユナルリビング	15
1-3. 実践型コミユナルリビングの歴史的経緯とその概要	19
1-4-1. 宗教型コミユナルリビングの始まり	22
1-4-2. 宗教型コミユナルリビングの種類	24
英国系、ドイツ系、スウェーデン系	
1-4-3. 宗教型コミユナルリビングの特徴	29
1-5-1. 社会改良主義型コミユナルリビング	30
（オウエン主義、フーリエ主義）	
1-5-2. 社会改良主義型コミユナルリビングの特徴	34
1-5-3. 多様化する社会改良主義型コミユナルリビング	36
1-6-1. キブツ型コミユナルリビング	42
1-6-2. キブツの運営原則	43
1-6-3. 現在のキブツ	44
1-7. スピリチュアル型コミユナルリビング	45

1-8. コハウジング型コミユナルリビング	49
1-9. リタイアメント型コミユナルリビング	52
第2章 ロバート・オウエン「ニュー・ハーモニー」の検討	54
2-1. ロバート・オウエン「ニュー・ハーモニー」誕生の推移	54
2-2. 「社会制度論」で語られた共同社会の理想型	56
2-3. 共同体の形と運営形態	57
2-4. ニュー・ハーモニーの誕生	59
2-5. ニュー・ハーモニー後の共同体構想	62
2-6. 平等という思想	63
2-7. ルソー『社会契約論』	63
2-8. エンゲルスによる批判と評価	66
第3章 日本におけるコミユナルリビングの系譜	67
3-1. 日本におけるコミユナルリビングの歴史	67
3-1-1. 武者小路実篤「新しき村」	69
3-1-2. 有島武郎「樺太共生農園」	72
3-1-3. 一燈園（京都）	72
3-1-4. 心境同人（奈良）	74
3-1-5. 幸福山岸会（三重）	75
3-1-6. ヤマギシ会の活動内容	76
3-2. 1970年前後の日本のコミユナルリビング	78
3-2-1. 共働学舎	80
3-2-2. 木の花ファミリー	83
3-2-3. コレクティブハウスかんかん森	84

3-2-4. C O C O 湘南台	86
3-2-5. 三角エコビレッジ SAIHATE	88
3-3. 日本におけるコミユナルリビングの特徴	89
第4章 考察とまとめ	93
4-1. コミュナルリビングの諸類型	93
4-2. 時代区分からみたコミユナルリビング	93
4-3. コミュナルリビングに共通する思想①	95
主流となる価値観からの離脱とオルタナティブな価値集団への帰属	
4-4. コミュナルリビングに共通する思想② 平等と共同	97
4-5. コミュナルリビングに共通する思想② 禁欲性	99
4-6. コミュナルリビング間で異なる要素	100
4-7. コミュナルリビングの体系整理	102
4-8. コミュナルリビングの現代的意義	104
4-9. コミュナルリビングの持つ課題	105
4-10. 食と宗教倫理性	107
参考文献	109

コミュニアリビング（共同生活）の現代的意義について

0-1. はじめに

人類は社会的な動物である。人間をアリストテレスは「ポリスの動物」と表現し、ユヴァル・ノア・ハラリは、「われわれは群生する動物であるために「想像による共同体」というものを作り出すことができる。この能力のおかげで、われわれはどこに属するのか、そして誰を心にかけて世話するのかといった思考を広げることができる。」（『サピエンス全史』（2016））と語った。人はさまざまな人々やコミュニティや社会と関わり合いを持ちながら生活をいとなむ。そして、本人もそのコミュニティや社会の一員として、何らかの役割を果たす。社会とのさまざまな関係を紡ぎつつ人は生活する。

生活を営む中で、人は何らかの共同体（ゲマインシャフト）や集合体（ゲゼルシャフト）に属する。テニースは、ゲマインシャフトを「他人の意志または身体を保存する傾向を持っている肯定的な関係によって形成される集団」「すべての信頼に満ちた親密な水いらずの共同生活」として、家族、家、生活、宗教、言語、慣習、民族、農村などを具体的事例として挙げた。またゲゼルシャフトは、「他人の意志または身体を否定する傾向を持つ集団」として、営利、旅行、学術、会社などを事例として挙げた¹。しかし、人がどのような共同体、集合体に属しているかは、時代背景や社会環境により大きく異なる。またそれがゲゼルシャフトか、ゲマインシャフトであるかについても同様である。

¹ Tonnies Ferdinand (1887) *Gemeinschaft und gesellschaft* (フェルナンド・テニエス 杉之原寿一訳 ゲマインシャフトとゲゼルシャフト 純粋社会学の基本概念 岩波文庫)

例えば前近代社会の日本では、農民は、本家・分家などの親族組織、生産や相互扶助を行う集落の村民、寺社を中心とする檀家などを身近な共同体として意識し、武士層は家や藩を共同体として認識していたのではないか。明治以降の国を頂点とする統治体制が敷かれて以降の近代社会では、国民は「天皇の臣民」として、国そのものをゲマインシャフトと認識することがあったかもしれない。

現在社会に住まうわたしたちが安心を感じ、信頼できる共同体とは、一体どのような存在だろうか。共同体に属することは、運命共同体という言葉に象徴されるとおり、同一の運命や困難を分かち合うことを意味する。共同体に守られることで、人々はそこに「安心」「信頼」、そして「救い」を感じることができる。

その一方で、共同体はそこに属する人々に対し、ある種の「価値観」や「思想」を強要してくる可能性も否定はできない。共同体はその意味で全体主義的でもある。場合によっては、オカルト宗教のように人々を危険な方向に導いてしまう可能性も否定できない。「安心」と「強要」とともに共同体は存在する。

「信仰」や「宗教」に基づく共同体は、個々人の悩みや苦悩に救いや救済を与えてくれる存在であると同時に、近年の民族紛争に見られるように、宗教観の違いが対立を生み出す場合もある。「家族」という共同体は、両親の愛情に育まれているという安心感を提供してくれる場であると同時に、時としては、父権や母権が子供のアイデンティティ形成を脅かす存在ともなる。このように共同体の存在が提供する価値は極めて多彩で複雑である。

本論においてはそうした多様な意味を持つさまざまな共同体のなかで、人々が血縁や婚姻に寄らず、何らかの形で共に暮らす生活の共同

体、「コミユナルリビング」に焦点を当て、その現代的意義と可能性について考察しようとするものである。

0-2. 「コミユニナル・リビング（共同生活）」を取り上げる理由

筆者が「コミユナルリビング」をテーマとして取り上げた問題意識について説明する。

冒頭に述べた通り、人間は社会的動物として各種共同体に属し、社会関係を築き生活を営む。現在の日本社会において、個人が信頼する強固な共同体のひとつが「家族」である。「家族」は共同体のなかにおける重要な基礎単位として、養育や居住、生計の共同化、病気や介護ケアなどがそこで行われる。「家族」は現代においても生活を営む上での重要なシェルターのひとつである。

「家族」を共同体の最小単位としながらも、「個人」や「家族」のまわりには、これを支えるさまざまな形の「共同体モデル」がそれぞれの時代に応じて存在した。

前近代の農村社会では、集落単位での生産や相互扶助が行われる「村落共同体」が大きな役割を果たしていた。

近代社会となり産業化が進行し、都市部への人口移動・集中が進む中で「核家族化」が進行した。こうした中で従来の「村落共同体」に代わる役割の一部は「会社共同体」が担うようになった。「会社共同体」は、終身雇用制度、利益の社員還元、充実した福利厚生制度など、従業員重視の政策を採用することで社員の高い企業ロイヤリティを生み出し、会社と社員が一体となりつつ高度経済成長の日本を支えていった。企業家族運動会や社員旅行などが頻繁に行われることで、社員は企業と

の精神的一体感を深めていった。経営者側からも共同体としての企業の一体感を深めるアプローチがなされた。例えば、創業者稲森和夫氏が率いる京セラは企業理念として「大家族主義」を掲げていた。

しかし、1980年前後から「会社共同体」は、経済成長の鈍化に加え、経営効率を重視するグローバリズムの流れのなかで次第にその役割を終えることになる。

加えて、共同体の基礎単位である「家族共同体」自体もその内実が変化し、脆弱化さらには機能不全となるケースがしばしば見られるようになってきた。

0-3. 共同体（ゲマインシャフト）の揺らぎ

血縁や婚姻を基礎とする家族を共同体として捉えようとすることについての限界は、既に多くの識者の指摘するところであるが、こうした動きは日本が成熟社会を迎えた1980年代からさまざまな形で表出してきた。1990年代における家族社会学の中心主題は、家族の再定義問題が中心であった。²

この時代に家族再定義の必要性に迫られたのは、従来考えられていた「居住および生計を共に営む人たちの相互ケア」という家族概念が、実際の家族のありようと齟齬を来す局面がしばしば見られるようになってきたからである。そのひとつが、家族を構成する個々人の孤立や、共に暮らしつつも相互コミュニケーションが不全となる「個族化」「孤族

² 例えば、久保田裕之（2012）「世帯概念の再編—非家族世帯と『家計の共同』をめぐって」『年報人間科学』33:27-42.

化」の動きである。こうした動きを上野（2008）は、家族の客観的な定義は、ほぼ崩壊しているとして、むしろ「ひとびとは家族を何と考えるか」というファミリー・アイデンティティ研究の重要性を指摘し、家族の臨界点を明らかにしようとした。³

森田芳光監督による映画『家族ゲーム』（1983）で話題となった、レオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」さながらに、家族が横一列に並び食事をするシーンは、まさにこの時代に進んだ家族相互の孤立、コミュニケーションの不全を象徴的に表すものであろう。

家族共同体のゆらぎのもうひとつの理由は、「3世代」から「核家族」、さらには「単身世帯」という世帯構成の変化にある。その結果、従来「家族共同体」がその多くを担っていた「居住や生計、ケア（養育・病気・介護）という役割の相互代替機能」が低下してしまったのである。

かつて、親の介護の役割を主に担っていたのは、同居する子供夫婦（とりわけ妻）の役割であった。しかし核家族化が進行し、子供たちのみに親の介護を担わせることが事実上困難となった。

こうした動きを受け 2000 年には公的介護保険法が施行され、介護は共同体内部で解決するべきものではなくなった。公的保険制度の導入により、介護は制度化し、共同体から外部化され、社会化されていった。従来、共同体内（ゲマインシャフト）で処理されていた介護は、社会制度（ゲゼルシャフト）として処理すべき課題として転化されたのである。そして介護は、身内のみならず、介護保険事業者がその役割を担うようになった。またこうした家族介護の問題に留まらず、この時期児童養護や障がい者福祉に関わる各種支援制度なども整えられていったの

³ 上野千鶴子「家族の臨界 - ケアの分配公正をめぐる -」2008, 社会学研究, 20(1):28-37

も、家族というゲマインシャフト機能が低下した結果と捉えることもできるだろう。

0-4. 社会保障制度の機能低下（ゲゼルシャフトの揺らぎ）

こうした動きは、テンニースの語ったゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの動き、共同体社会から市民社会へ移行する動きと重なると言える。産業構造が変化し、高度情報化が進行する中で、我々の周辺社会にあるゲマインシャフト的なものは、徐々にゲゼルシャフト的なものに置き換わって行くのかもしれない。そして、従来、家族や村落（地域）共同体が担っていた役割は、地方自治体や国家が社会制度として代替的役割を果たしていくようになっていったのである。

しかしその後、公的介護保険法の施行から20年あまりが経過し、高齢化が一層進展する中で、一旦は社会制度化された介護システムの将来像に再び、危険信号が点り始めている。理由のひとつに挙げられるのは、社会保障費の急激な増大である。高齢者人口が増大する一方で、年金財政、保険財政を支える現役世代の人員は減り続けている。医療保険、介護保険のサステナブルな継続に信号が点るのは時間の問題である。実際、すでに地域包括ケアシステムという名の元に、従来、要支援介護者を対象として行われていた日常生活支援事業の一部を、総合事業という形で、地域自治内における互助・共助の仕組みに回帰させようという動きも見られている。これは、いわばゲゼルシャフトからゲマインシャフトへの先祖帰りのようにも見える。しかし、社会構造そのものがすでに大きく変節している中で、そうした地域の互助に頼ろうとするシステムの回復、再構築は果たして可能なのだろうか。こうして再び、頼

りたいと考えられているゲマインシャフトの回復に光明を見出すことは出来るだろうか？

0-5. コミュナルリビング（共同生活）への着目

いわゆる血縁、婚姻などの繋がりにより親密圏を形成する家族や親族、居住の物理的近隣性による村落、集落ではなく、「特定の理由に基づき集った人々がともに暮らすあり方」をコミュニナル・リビング（共同生活）と捉え、その可能性について考えてみる。

本章の最初に述べたゲマインシャフトの多くは、家族や村落、会社など、「人間の本来備わる本質意志によって結合する有機的な共同社会」と語られるものが中心である。さらにテンニースは、ゲマインシャフトを、血のゲマインシャフト（家族や民族）、場所のゲマインシャフト（村落や共同体）、精神のゲマインシャフト（中世都市や教会）と分類した。

歴史を遡ってみると、テンニースの語ったそれぞれのゲマインシャフトに収まらないさまざまな共同生活のありようが存在した。これらの多くは、共同体に属する人々が自らの意志を持ち、これらゲマインシャフトから離脱し、新たな共同体に移ることを希望し、生活を共にしたものであった。

本論では、欧米及び日本国内におけるさまざまなコミュニナルリビング（共同生活）の歴史的系譜を辿ってみることで、家族・地域＝ゲマインシャフト、自治体＝ゲゼルシャフトの機能がともに低下した現在において、再度、人々の心理的・物理的紐帯を結び直していくためのヒントを得てみたいと考える。

第1章 コミュナルリビング（共同生活）の定義と歴史推移

1-1. コミュナルリビング（共同生活）とは

コミュニティリビング（共同生活）の歴史的系譜を辿る前に、この語句の定義とおおまかな類型化を試みておきたい。コミュニティリビングとは、「血縁・婚姻などを起因とし、生活を共にする家族（血縁家族/婚姻家族）ではなく、所属や来歴の異なる人々が、特定の家屋内や場所に集まり、日常生活の全部もしくは一部を共同しながら生活するスタイル」のことを指す。

コミュニティリビングは、共同体の一種もしくは一部である。コミュニティリビングと共同体は一見同義にも見えるが、例えば大塚久雄『共同体の基礎理論』⁴（1955）では、中世ヨーロッパにおけるゲルマン的共同体の崩壊を「共同体の崩壊」と捉える場合があるように、共同体はより広義の政治経済学的見地から使用される場合もある。ここで語るコミュニティ・リビングは、例えば、1960年代アメリカで新しい価値観や生き方を模索する為に若者たちが集まり自主運営したコミュニンのように、より少人数で運営する共同生活体のイメージに近い。

コミュニティリビングは、現在自分が属するコミュニティや家族の生活から物理的にも精神的にも離れ、宗教的理念や政治理念、何らかの生活ポリシーを同じくする人々と共同生活を営むことで、自らが理想とする生活スタイルを築き上げようとする動きでもある。

⁴ 大塚久雄（1955）共同体の基礎理論 岩波書店

自らが理想と考える社会という意味において、コミユナルリビングはユートピアにも類似している。ユートピアは、トマス・モアが描いた理想国家の名称であるが、その後、実在、非実在を問わず理想郷を示す一般名詞となった。資本主義の対抗勢力として生まれた社会主義や共産主義社会もユートピア社会として語られる場合もあるが、こうした未実現のユートピア的共同生活のあり方も、コミユナルリビングのひとつとして検討すべき対象範囲のひとつと言えるだろう。

コミユナルリビングは、夢想・構想のレベルに留まった非実在の「ユートピア（空想）型コミユナルリビング」と、実際に共同生活が行われた実在の「実践的コミユナルリビング」に分けることが出来る。本論で取り上げるのは、主に後者の「実践的コミユナルリビング」であるが、「ユートピア型コミユナルリビング」がどのように語られていたかについても多少触れておきたい。

1-2.ユートピア（空想）型コミユナルリビング

現実に存在しない理想的社会に対する夢想、願望は常に人間の潜在的欲望として存在している。いにしえから数多くの理想的国家や社会が構想され、夢想され続けてきた。

プラトン『国家』、ブルタルクス『リュクルゴスの生涯』、トマン・カンパネラ『太陽の都』、ヴァレンティン・アンドレアエ『クリスティアノポリス』、フランシス・ベーコン『ニューアトランティス』、ジェラード・ウィンスタンリー『自由の法』など、数多くの書物において理想的な社会や国家が語られてきた。

グレゴリー・クレイズは、『ユートピアの歴史』（2011）で、古今東西の神話体系から各種ユートピアに関する小説、SFで描かれた宇宙世界やディストピアまで、膨大なユートピアに関する言説を分析検討し、ユートピアの思索発展を、①神話的段階、②宗教的段階、③実証的段階の3段階として整理している⁵。

神話的段階に区分されているのは、主にギリシア、ローマ時代に描かれた理想社会である。ここでは、例えばヘシオドスが『仕事と日』の中で語った古代の神々の日常、ホメーリスが『オデュッセイア』の中で語った地中海のどこかにあるアイアイエー島などがユートピア神話世界として語られた。それらの時代設定はギリシア、ローマを遙か過去に遡った「古代」であった。

宗教的段階におけるユートピアの時代設定は「天国としての来世」、「人類誕生の地としてのエデン」など、別位相の世界が中心である。また、イエス・キリスト再臨の可能性に対する熱烈な願望が「千年王国思想」などを生み出していったが、これもユートピアの一類型と言える。

実証的段階は、宗教的段階における宗教的救済としての別位相世界に代わり、世俗的な形でもたらそうとしたものである。この段階においては「人は理想を描くというより、実現することに気を砕き、近代性の頂点を指向する」ようになったとクレイズは語る。

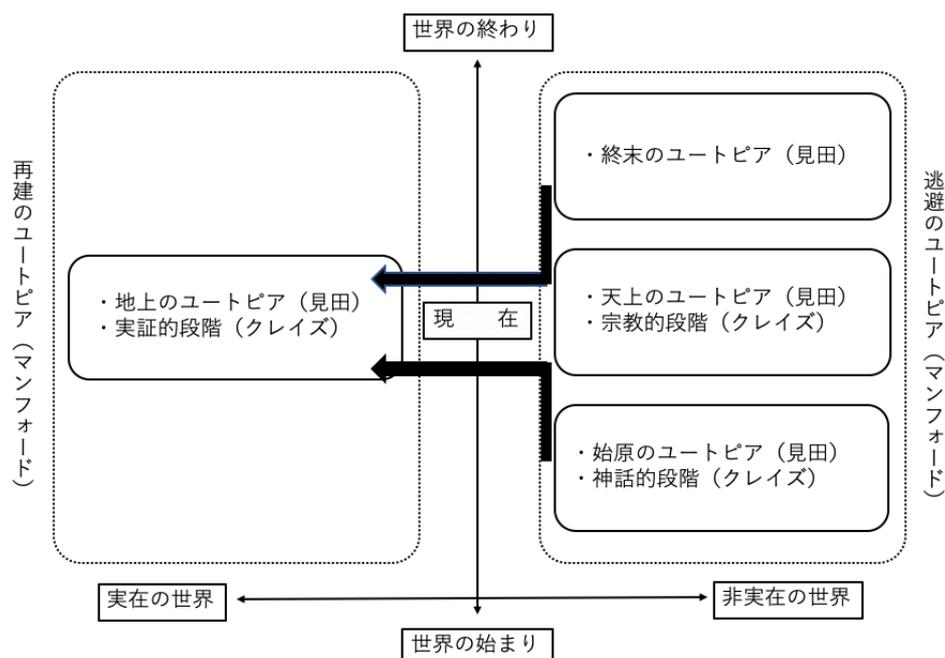
また同じく見田宗介（真木悠介）（1979）は、ユートピアを、①始原のユートピア、②終末のユートピア、③地上のユートピア、④天上のユートピアの4つのタイプに分類している。

⁵ Gregory Claeys (2011) *Searching for utopia the history of an idea* (グレゴリー・クレイズ 孝之 監訳 小畑拓也訳 ユートピアの歴史 東洋書林)

ルイス・マンフォードはユートピアを、「逃避のユートピア」と「再建のユートピア」に分類し、「逃走のユートピア」を「完徹するには余りにも複雑化され、(…)「きびしい現実」から避難する疑似世界」として位置づけ、「再建のユートピア」を「幼稚な欲望と願望に色どられているけれども、(…)それらが実現される世界を考慮している」⁶ものと語っている。

彼らがそれぞれに語ったユートピアを大きく整理すると図1のように説明することが出来る。

図1 ユートピア型コミュニアリビングのタイプ分類



縦軸として世界の始まりから、現在、そして終末に至る時間軸を、横軸として現実、非現実の軸を設定した。そうすると、見田、クレイズの

⁶ Lewis Mumford (1922) *The story of utopias* Boni & Liveright, Inc. (ルイス・マンフォード

語った個々のユートピアはそれぞれのようにプロット出来るだろう。図の中の矢印の動きは、クレイズの語った段階的發展（神話的段階→宗教的段階→実証的段階）の動きを示したものである。

本論では、ユートピア型コミューナルリビングの個々の内容には言及はしないが、ここでは実証的段階（クレイズ）の代表的な作品として、トマス・モア（1516）の『ユートピア（utopia）』⁷の内容にのみ触れておきたい。ユートピアという語句はモアの発案によるものだが、ギリシア語の οὐ (ou, 無い)、τόπος (topos, 場所)を組み合わせた「どこにも無い場所」を意図したと言われている。

この物語は、ポルトガル生まれの資産家であったラファエル・ヒロスデイが、アメリゴ・ヴェスプッチと共に世界の隅々に航海した折に、彼から離れてしばらく滞在したユートピア島の物語をモア卿が聞き書きする形を取っている。モアがこの物語を執筆した動機としては、当時の英国政府の国家運営方針（例えば刑罰など）の批判を目的として執筆されたものであると言われている。

『ユートピア』の主な内容は以下のようなものである。

ユートピア島にある54の都市は、ほぼ同規模でかつ適度に離れており、それぞれが自立経済圏を成している。都市の中は都市経営を司る部門と農家に分かれ、農業技術の習得と熟練を目的に、一定の期間で役割交換がなされている。職業の種類は、農業を除くと、毛織り業、亜麻織業、石工業などで都市経済を維持するための必要最低限の職種である。労働は一日6時間、睡眠は8時間、食事以外の時間は有益な知識の習得が推奨されている。衣服は、男女ともにほぼ共通で、住宅は補修を続けることで長持ちする家に住んでいる。それぞれの家族で生産されたも

⁷ Thomas More (1556) *Utopia* (トマス・モア 平井正穂訳 ユートピア 岩波書店)

のは、市場の倉庫に運び込まれ、それぞれが必要とするだけ持ち帰ると私有財産制の放棄と共有制度が採用されている。労働者の中から一部の知識人が選抜抜擢され、外交使節、司祭、市長などが選ばれ都市運営が行われる。

この物語の中で採用されている国家運営の特徴としては、「私有財産の放棄と共有制度」、「競争主義の排除」、「節度のある質素な生活」、「学問修得による共通の思想の獲得」などがあげられる。

このような特徴は、それ以前に語られた神話的段階や宗教的段階での社会においても少なからず語られていたものであったが、その一方、この後の章で説明する実践的コミユナルリビングのいくつかにも散見することが出来る。その意味においては、これら要素は人々が考える理想的社会の共通因子として指摘することが出来るかもしれない。ユートピア型コミユナルリビングに関する長年の思索や構想は、この後に登場する実践的コミユナルリビングのシーズベッド（苗床）の役割を果たしたのである。

1-3. 実践型コミユナルリビングの歴史的経緯とその概要

実践型コミユナルリビングが最初に登場したのはおおむね 17 世紀以降のことである。

コミユナルリビング（共同生活）の初期に多数を占めたのは、宗教的自由を求め欧州各地から新天地アメリカに移住した人々による「宗教型コミユナルリビング」であった。次いで、19 世紀になると、社会改良主義者のロバート・オウエンやフーリエなどによる「社会改良主義型コミユナルリビング」が生まれた。当初は空想的社会改良主義を唱えるオ

ウエンやフーリエの思想に感化されて設立されたものが中心であったが、その後 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけては、無政府主義、共産主義思想などを導入したもの、株式や土地共有システムなど発展しつつある資本主義のシステムを採用した多様な社会改良主義型コミユナルリビングが発生し、これらは最終的に、ソ連のコルホーズ、モシャブ、イスラエルのキブツとして結実していった。その他、フェミニズムや心理学の影響を受けたコミユナルリビングなども登場したが、こうした新たな共同生活体設立の動きは米国では 1920 年頃を境に一旦静まることになる。

動きが少なくなった理由は、いくつか考えられる。ひとつは世界がほぼ発見され尽くされたことである。マルコポーロの『東方見聞録』やコロンブスによる新大陸発見以来、16、7 世紀の主要西欧各国にとって経済成長のひとつとして大いなる役割を果たしたのが植民地化政策であった。植民地化による領土の拡大は、それに伴い異国の風土や文化が、西洋諸国に舞い込み、エスニック、エキゾシズム文化を産んでいった。また、人々が知り得ぬ世界が辺境の地に存在するという事実が、人々をその地をユートピアとして見立てる衝動に駆り立てた。アメリカに多くの宗教組織が移住したのも、一部には新大陸の発見こそが、実は千年王国の訪れであると信じた人々がいたためであり、オウエンやフーリエのユートピア・コミュニティが本国の英国やフランスではなく、米国で誕生したのもそうした辺境の地＝ユートピア願望がその根底にあったからであろう。

しかし 20 世紀となり、ほぼ世界は発見されつくされた。辺境の地＝ユートピアは消滅したのである。そして代わりに新たに生まれたユート

ピアは、「地球上にある、ここではない他所」ではなく、「未来」や「宇宙」という新たなユートピア世界であった。

また 18 世紀から続いた資本主義対共産主義の争いが一旦、1917 年に設立したロシア・ソビエト連邦社会主義共和国の誕生により終了したことも、コミユナルリビング設立の沈静化理由として挙げられるだろう。オウエンやフーリエが目指した労働者達の自主経営による平等な社会は、社会主義国家の誕生により一旦実現してしまったと判断することによって、資本主義国家内でその実現を求める必然性は消滅してしまっただのである。

その後、再び新しいタイプのコミユナルリビングが生まれてきたのは 1960 年以降のことであつた。行き過ぎた資本主義社会に対する反動とでもいうべき、アヴァンギャルドなヒッピー・コミュニティや、インド哲学、ヨガなどの精神世界を特徴とするスピリチュアル型コミユナルリビングが生まれた。⁸

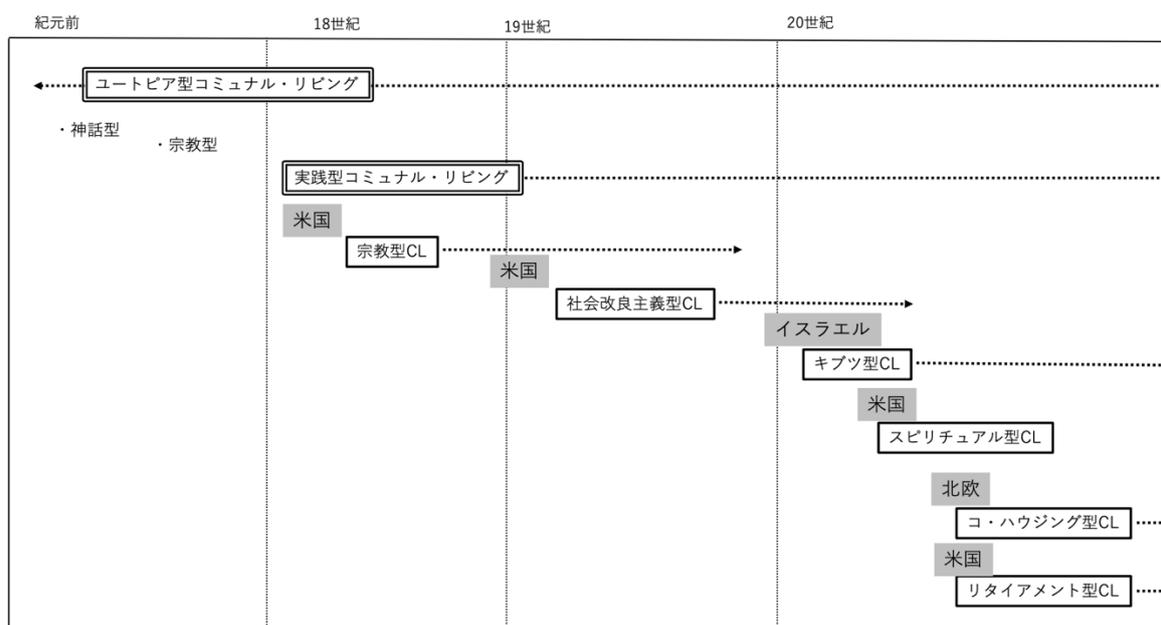
また 1970 年頃、北欧を起点に生活の一部を共有するコ・ハウジング型コミユナルリビングが誕生し、それまでのコミユナルリビングとは異なる新しい共同生活スタイルの様相を見せた。ほぼ同時期に米国で、CCRC(Continuing Care Retirement Community)と呼ばれる高齢者のリタイアメント型コミユナルリビングが誕生した。生まれ育った場所に住み続けることにさほどのこだわりを持たない米国高齢者が、アリゾナやフロリダなどの気候の良好な場所に自立した状態で移住し、高齢期における趣味、介護医療などのサービスを受けるリタイアメント型コミユナ

⁸ Robert S. Fogarty (1980) *Dictionary of american communal and utopian history*, Greenwood press

ルリビングである。中には数千人規模のリタイアメント・コミュニティも存在する。

本章では、こうした実践的コミユナルリビングの歴史をタイプ別に辿ってみることにする。

図 2 コミュナルリビングの歴史推移



1-4-1. 宗教型コミユナルリビングの始まり

メルティング・ポットという言葉に象徴されるように、米国は海外からの数多くの移民たちにより形成された国家である。建国以来、数多くの欧州からの白人移民やアフリカ大陸からの黒人たちが移住、もしくは強制的に送り込まれた。

移住者たちの一角を占めたのが、母国で宗教的迫害を受け、移住、疎開してきた人々である。彼らの多くは、正統派カソリック教徒やプロテスタントではなく（いわゆるマックス・ウェーバーが語る正統的「教

会」に属する人々)ではなく、周辺もしくは異端として認識されていた「宗派(セクト)」に属する人々が多い。米国における共同生活コミュニティの歴史は、そうした自らの信仰心を守ろうとする人々たちによってまずは形成されていった。彼らにとっては新大陸の存在そのものが、来るべき千年王国の到来に他ならなかった。

新世界アメリカのはじまりは、1620年メイフラワー号に乗り込みこの地にやってきたピルグリム・ファーザーズと言われている。彼らは母国イギリスにおいて宗教的迫害を逃れた清教徒(ピューリタン)たちであった。

ピルグリム・ファーザーズに限らず、欧州から米国に移民してきた人々の中には宗教的理由を背景にこの地に自由を求め移住してきた人々も数多くいた。⁹

16世紀から17世紀にかけて欧州各国において、それまでの正統信仰であるカソリックに加え、新たにプロテスタント(ルター主義・カルヴァン主義)という大きな宗派が生まれ、国により概ねカソリック、プロテスタントの色分けがなされた。イタリア、スペイン、フランス、ドイツ南部、ネーデルランド南部はカソリックとなり、ドイツ北部、スカンディナヴィア、イギリス諸島、ネーデルランド北部はプロテスタントが主流を占めた。¹⁰しかしそうした中でも、それぞれの地域において、新たな宗派や分派が生まれていった。例えばそれらは、ユニテリアン(神

⁹ Nancy Green (1994) *L'odysee emigrants et ils peuplerent l'Amerique* (ナンシー・グリーン

明石紀雄監修 村上伸子訳 多民族の国アメリカ ー移民たちの歴史 創元社 pp20)

¹⁰ David Christie - Murray (1976) *A history of heresy* (D.クリスティ=マレイ 野村美紀子訳

異端の歴史 教文館)

の単一性を主張する)、三位一体論、ペンテコステ派(預言の賜物の復活を信じるもの)、千年王国説を信じるもの(地上の玉座からキリストが支配し、聖人(かれら自身)が統治する世界を待望するもの)、クエーカー派、シェーカー派、独立派、分離派(原始キリスト教への回帰を示すもの)、バプテスト派、セブンスター・アドヴェンティスト、プリマス・ブレズレンといった宗派で、これらの多くもしくは一部が迫害を受け祖国から新大陸をめざしたのである。

1-4-2. 宗教型コミューナルリビングの種類

欧州からの移住を契機にした米国に於ける宗教型コミューナルリビングは、信仰される宗派によって、もしくは以前居住していた国によって大まかに分類することができる。移住元の国としては、主にイギリス、ドイツが中心であったが、中にはロシア、スウェーデンからの移住も含まれている。

< 英国系 >

イギリスからの移民として最も著名なものは「SHAKER COMMUNITIES (シェーカー・コミュニティ)」である。この共同体は、1774年に英国ボルトン(Bolton)でマザー・アン・リー(Mother Ann Lee)により創設され、その後米国に移り、250年近く経た現在においても続くクォーカー系のキリスト教コミュニティである。シェーカー教徒は、彼らの建造物のシンプルさ、製造物の統一性と美しさ、とりわけ家具において特筆される。

元々、シェーカー・コミュニティは、1705年にフランスから英国にやってきたクォーカー教の伝統を持つカミサード預言者に起源を持つ。

1774年にLeeと他の8名は当初ニューヨークに、続いて近郊のアルバニー（Albany）に移住し、その後マザー・アン・リーはニューイングランド中を旅行して人々を改宗に導いていった。彼女の強いリーダーシップの元で地域のコミュニティが運営され、彼女のビジョンがシェーカー生活を規定した時代であった。

しかし、その後マザー・アン・リーは亡くなり、コミュニティはジョセフ・ミーシェム（Joseph Meacham）とルーシー・ライト（Lucy Wright）指導の下でコミュニティが形成されるようになると、共同体としても次第に形が伴っていった。

19世紀になると、シェーカーは、その影響を東部に拡げて行った。コロニーは、オハイオ、インディアナ、ケンタッキーにも建設され、1826年には19の永続的コミュニティが設けられた。中西部にも信者は広がり、農業と商業の交易により繁栄していった。

19世紀半ばにはマザー・アン・ワーク（Mother Ann's Work）と呼ばれる強い精神的・宗教的リバイバリズムが起こった。このリバイバリゼーションの動きは、メンバーによるインスピレーションなドロイーイング、歌、詩歌などの出現によって特徴付けられる。米国で市民戦争が繰り広げられた時代、シェーカー教徒数はほぼ6千人を維持した。この時代がシェーカーのほぼ全盛期であったと言える。

19世紀後半になると、コミュニティの数が減少し、宗教性やミッション、目的性が薄れていった時期に当たる、1875年には、初期のコミュニティが閉鎖され、1875年から1947年にかけて、コミュニティは資産を売却するほど窮地に追い詰められた。現在は、シェーカー・コロニ

ーは、サブスデイレイク、メイン州（Sabbath day Lake, Maine）とカンタベリー、ニューハンプシャー州（Cantaerburry, New Hampshire）の2カ所のみとなり、新しい入植者は認められていない。

シェーカー・コミュニティは、宗教型コミュニナル・リビングの最初期に生まれ、その長い歴史の中において成功を収めたコミュニティのひとつであろう。

<ドイツ系>

18世紀の後半、ドイツには数多くのキリスト教分派が誕生したが、それらのいくつは全身を水に浸して罪を清める浸礼主義や神秘主義を信じる敬虔主義、靈感主義者や再洗礼派であった。コミュニティのいくつかは、教義に基づき独身主義や資産の共有などが求められた。

最も初期のドイツ系コミュニナルリビングとしてあげられるのは「エフラタ（EPHRATA）」（1732-1770）である。ドイツの神秘主義キリスト教徒であったヨハン・コンラッド・ベーゼル（Johann Conrad Beissel）が1720年にアメリカに移住。その後、集団リーダーとなった彼が1732年に設立したのが、エフラタであった。彼らはケダール（Kedar）と呼ばれる共同住宅を建築し、“ナイト・ウォッチ”と呼ばれる沈黙の夜の礼拝を行った。巨大な礼拝所が、共同穀物倉庫、製パン所とともに建てられた。1740年には34名の男性がジオニティック・ブラザーフット（Zionitic Brotherhood）に、35名の女性がスピリチュアル・ヴァージン・クラス（Spiritual Viegins class）で生活を共にした。「ハーモニー・ソサイエティ（HARMONY SOCIETY）」（1805-1898）は、預言者であるジョージ・ラップが率いたドイツ人の分離派コミュニティである。1803年にドイツのヴェルテンベルク

(Wurttemberg) から移住し、1805年にペンシルバニア州バトラー郡 (Butler County) にコミュニティを創設した。メンバーたちは、権威をもつルター派教会に反旗を翻し、聖書の正確な解釈を重視し、ラップの指導に服従した。ハーモニー・ソサイエティは、その後この地を離れ、南西インディアナのワバシュ・リバー (Wabash River) に1万3000エーカーの土地を購入し、そこをハーモニーと命名した。彼らは、農業、林業、綿製品などを発展させ、メンバーは1千人まで増加したが、1825年にこの地をロバート・オウエンに売却し、再びペンシルバニアに戻り、エコノミーという名のコミュニティを創設した。¹¹

「アマナ・ソサエティ (AMANA SOCIETY)」(1843-1932) は、ニューヨーク州エリー郡 (Erie County) に建設されたドイツ・ルーテル福音教会のコミュニティであった。エブハード・グルバー (Eberhard Gruber) とヨハン・ロック (Johann Rock) は、当初ルーテル福音教会の信者であったが、キリスト教の初期教義に関心が高め、次第に靈感主義的傾向を強めた。1826年、リーダーのクリスチャン・メッツ

(Christian Metz) は、信者ととともにドイツの Marienborn で共同生活を始めたが、その後1842年にニューヨーク州エリー郡 (Erie Country) に5000エーカーの土地を購入、800家族が移住した。¹²

「フッター派 (THE HUTTERRITES)」(1847-1877-現存) は、16世紀のドイツ再洗礼派にその原点を持つ。常にドイツ国内で迫害されていた彼らは、1770年、ロシア政府からの受け入れ表明により一旦はウクライナに移住する。しかしその後、受け入れは撤回されたため、彼ら

¹¹ pp.143

¹² pp.128

は米国への移住を決意する。その数は 800 名にのぼった。彼らは、当初サウスダコタをはじめ、いくつかの場所に分散して居住し、それらの場所は Bruderhof（兄弟の居住場所）と呼ばれた。

「聖ナザレ派コミュニティ（ST.NAZIANZ COMMUNITY）」（1854-1898）は、キリスト教信者ではあるが、いわゆる異端に属する人々ではなく、ローマ・カソリックに属する人々であったが、当時のドイツ・バーデンにおける急激な人口増加に伴う、就職難の結果として移住してきたものである。彼らは、ミルウォーキー（Milwaukee）に土地を購入し、先行部隊が整地し、植物を植え、教会を建てた。植民地生活の当初の 20 年は、すべての財産は共有であり、食事はコミュニティ・キッチンで提供された。結婚したものにはコテージが提供され、独身者は寄宿舎が提供された。1859 年以降コロニーは繁栄し、1864 年には農業生産を補強するためのなめし皮工場が設けられた。

<スウェーデン系>

「ビショップ・ヒル・コロニー（BISHOP HILL COLONY）」（1846-1862）は、スウェーデンの宣教師エリック・ジャンソンと彼の信者により設立された宗教コミュニティである。旧来のスウェーデン教会への反体制者を引き連れ、彼らは 1845 年にアメリカに移住、翌年にイリノイ州に居留地を構えた。麻の衣服の製造、養牛、工業品製造などにより住民の生計を維持し、一時期コミュニティは栄えたが、宣教師ジャクソンの死とともにコミュニティ運営は不安定さを増し、1862 年に共有制は廃止され、その後 2 つの信仰意思をもった別集団として分割された。

その他の宗教型コミューナルリビングの概要は表 1 の一覧に記す。

表 1 宗教型コミューナルリビング一覧¹³

コミュニティ名称	設立	終了	創立者	場所	内容タイプ	概要
エフエラタ EPHRATA COLONY	1732	1770	Johann Conrad Beissel	各地	ドイツ系	ドイツの神秘主義キリスト教徒であったヨハンがアメリカに移住し1732年に設立。浸礼主義や神秘主義を信じる敬虔主義を起源とし、初期のキリスト教が実践していた共同生活を実践した。
シェーカー・コミュニティーズ SHAKER COMMUNITIES	1774	2019	Mother Ann Lee	Bolton, England	シェーカー 教	1774年に英国BoltonでMother Ann Leeによって創設。彼らの建造物のシンプルさ、製造物の統一性と美しさが特筆される。現在もSabbathay Lake, MaineとCanterbury, New Hampshireの2カ所が存在する。
エルサレム JERUSALEM	1788	1819	Jamima Wilkinson	Seneca Lake, New York	原始主義	創設者Jamima Wilkinsonの啓示により発達。平和主義、独身主義、その後にクォーカー教徒がモデルとした簡素な生活スタイルなどが特徴として挙げられる。
スノー・ヒル・ナニー SNOW HILL NUNNERY	1798	1900	-	Franklin Country, Penn sylvania	ドイツ系	Ephrata コロニーの分派として生まれる。修道メンバーに加えて、教会外部にもアウトドア・メンバーが存在した。1820-40年がピークでメンバーは40名程度。
ハーモニー・ソサイエティ HARMONY SOCIETY	1805	1898	George Rapp	Bulter county, Penn sylvania	ドイツ系	預言リーダー、ジョージ・ラップによるコミュニティ。1803年にドイツから300家族が移民し、1814年には南インディアナのWabash Riverハーモニーを創設。1825年にハーモニーをロバート・オウエンに売却し、再びペンシルバニアに戻り、エコノミーという名称のコミュニティを創設。
キートランド・コミュニティ KIRTLAND COMMUNITY	1830	1835	Sidney Rigdon	ake County, Oh	モルモン教	当初バプティスト教会のメンターとして原始キリスト教に基づく共有コミュニティを唱えたが、その後モルモン教に大いに感化され、モルモン教こそが真のローマ教皇の会派であると主張。
アマナ・ソサイエティ AMANA SOCIETY	1843	1932	Eberhard Gruber . Johann Rock	Erie County, New york その後、 Iowa Country, Iowa	ドイツ系	祖国ドイツの州政府とルーテル教会によって迫害されたドイツ人により建設されたコロニー。1842年にニューヨークに移ると共産主義（共産主義）を取り入れる。
ベテル-アウラ コロニー BETHEL-AURORA COLONIES	1844	1880	William Keli	Shelby Country, Miss ouri	ドイツ系	William Kiliによって設立されたドイツ系キリスト教徒コミュニティ。ペンシルバニア州のラップパイト・コミュニティがKeliの率いるメソジスト教会に合流。北ミズーリに移住しBethelを創設。1856年にオレゴンのリバーバレーにAuroraを創設した。
ビショップヒル・コロニー BISHOP HILL COLONY	1846	1861	Erik Jansson	Henry Country, Illino is	スウェーデン 系	スウェーデンの宣教師エリック・ジャンソンと彼の信者により設立された宗教コミュニティ。従来のスウェーデン教会への反体制者を引き連れ、1845年に新大陸に移住、46年にイリノイ州に居留地を構えた。
フッター派 THE HUTTERRITES	1847-77	現存	-	South Dakota	ドイツ系	16世紀ドイツ再洗礼派に原点を持つ。西欧では常に虐待を受け、1770年にロシア政府から受け入れを表明されウクライナに移住するが、その後アメリカに移住。800名の彼らはサウスダコタをはじめいくつかの場所に分散居住し、Bruderhof(兄弟の居住場所)と呼ばれた。
ナザレ派コミュニティ ST.NAZIANZ COMMUNITY	1854	1898	Father Ambrose Oshwald	Manitowoc Country, Wisco nsin	宗教コミュニ ティ (ドイツ系)	ドイツ、バーデンの労働者は就職難となり、113名の人物が米国に移住。植民地生活の最初の20年は、すべての財産は共有であり、食事はコミュニティ・キッチンで提供された。結婚したものにはコテージが提供され、独身者は寄宿舎が提供された。
アミティ・コロニー AMITY COLONY	1898	1910	Salvation Army	Holly, Colorado	宗教コミュニ ティ (救世軍)	救世軍によって創設されたコロニー。ウィリアム・ブースの「In the Darkest England an the Way Out(1890)」の中での貧困を軽減する自給自足都市と農業コロニーの概念を実現しようとしたもので、カリフォルニアとコロラドとオハイオに設けられた。
バーニング・ブッシュ THE BUENING BUSH	1912	1919	メソジスト教会 信徒	Bullard, Texas	宗教コミュニ ティ (メソジスト)	神聖主義メソジスト教会に反対意見を持つメソジスト教会信徒たちによって形成されたコロニー。1912年にグループはともに祈り、働ける場所として、1913年にスミス、チェロキー州に1520エーカーの土地を購入。移住メンバーはバーニング・ブッシュと呼ばれた。

1-4-3. 宗教型コミューナルリビングの特徴

米国における宗教型コミューナルリビングの多くはおおむね 18 世紀から 19 世紀初頭に生まれた。多くは欧州各国の母国において信仰上の

¹³ Robert S. Fogarty (1980) *Dictionary of american communal and utopian history*, Greenwood press

迫害を受け、米国移住し、共同生活の居を構えたものが中心であるが、中には貧困や就職難を理由としての移住もあった。宗教型コミユナルリビングの寿命は、おおむね数年から数十年が殆どであったが、なかには「シェーカー・コミュニティ (SHAKER COMMUNITIES)」や「フッター派 (THE HUTTERITES)」のように現在に至るまで 250 年近く活動を続けている共同体も存在している。多くの施設が長く続かなかつた理由としては、財務上の理由、信仰の分裂、世俗化などにあるが、最も多いのは初期リーダーの死去による組織結束の弱体化である。

宗教型コミユナルリビングの多くは、特定の宗教的リーダーの元に結集し、結成されたものが多い。多くは原始共産制スタイルが取り入れられ、主に農業や一部軽工業を中心とする生産と質素な消費スタイルが実施され、おおむね自給自足スタイル (サブシステム経済) が指向された。「オネダ・コミュニティ (ONEDA COMMUNITY)」では、銀食器の製造が主要産業として育ち、今でもオークション・サイトなどで「オネダ」と検索するとスプーンや皿などの銀食器が販売されているのを発見することができる。しかしながら、多くの場合はサステイナブルな自立継続はままならぬ場合も多く、外部の宗徒に寄付を募るといった方策に頼る共同体もあった。当初採用されていた共有制から私有制に移行するものもあった。

1-5-1. 社会改良主義型コミユナルリビング (オウエン主義、フリーエ主義)

宗教型コミユナルリビングに次いで 1820 年代から 1850 年代にかけて相次いで生まれたのが、ユートピア社会主義者として語られるロバー

ト・オウエンとフーリエの思想に感化されて創設された社会改良主義型
コミュニアルリビングである。ロバート・オウエンの詳細については、次
章で詳しく検討することとして、ここではアメリカにおける社会改良主
義型コミュニアルリビングの概況のみ記しておきたい。

ロバート・オウエンの思想に感化されて設立されたコミュニティは、
さほど多くはない。米国ではオウエンの思想に共鳴したオハイオ州出身
のスウェーデン牧師ジョン・ローが先行的に始めたコミュニティ、「イ
エロー・スプリングス・コミュニティ (YELLOW SPRINGS
COMMUNITY)」(1825-1827)とオウエン自身が設立した「ニュー・
ハーモニー (NEW HARMONY)」(1825-1827)が見られる程度であ
る。しかし、これらは創設から2年ほどでともに運営の混乱により崩壊
の憂き目に遭う。ニュー・ハーモニー失敗後も、オウエン自身は自らの
教えを広げつつ、アイルランドやクイーンズウッド (ハンプシャー)、
ヨークシャーなどにオウエン主義コミュニアルリビング創設を支援する。

一方、フーリエ主義に共感し設立されたコミュニティ数はオウエンの
それを大きく凌ぐ。これは、ジャーナリスト、アルバート・ブリズベン
がフーリエを広く紹介した影響が大きい。1840年から1846年までの
間に25のフーリエ主義共同コミュニティが創設された¹⁴。しかしなが
ら、それらの殆どは創設からさほど時期を経ず、オウエンのコミュニテ
ィ同様、解散・終了を迎えている。

「ブルック・ファーム (BROOK FIRM)」(1841-47)は、1841年に
ジョージ・リプリにより、マサチューセッツ州ウエストロクスベリーに

¹⁴ Jonathan Beecher (1998) *Charles fourier the visionary and his world* (ジョナサン・ビーチャー
福島知己訳 シャルル・フーリエ伝 幻視者とその世界 作品社 pp13)

設立されたウィリアム・エリー・チャニング・トランスデンタル・クラブの分派であった。このクラブは 1841 年に設立された教育的クラブで、作業負荷を平等に分担することで、余暇活動や知的な追求に十分な時間が利用できるようになると思った。その後、1843 年にこの組織はフーリエの社会主義思想に大きく影響され、その後はフーリエ思想の実践および普及の場となった。しかし、持続的に活動を維持する収入を得ることが出来ず、1847 年にコミュニティは解散した。

「ノース・アメリカン・フィランクス (NORTH AMERICAN PHALANX)」(1843-56)は、フーリエ主義に熱意を持った人々が、1843 年に資金を出し合い、ニュージャージー州のレッドバンクの近くに 673 エーカーの農場を購入し居を構えたものである。農業が彼らの主業務であったが、実際の農業経験者はわずかだった。1844 年からこのコロニー・メンバーはフーリエ主義の実践を試みた。1847 年には住宅を建て、1854 年に火事が襲うまではフェランクスは経済的にも社会的にも成功を取めたが、その後、コロニーは徐々に弱り、1956 年にコミュニティは終了した。

「ラリタン・ベイ・ユニオン (RARITAN BAY UNION)」(1853-56)は、ノース・アメリカン・フィランクスよりもより高度な産業、教育、宗教生活を望む人たちがつくった株式会社方式によるコミュニティである。リーダーはクォーカー教徒であり、商人でもあったマーカス・スプリングス (Marcus Spring)。1852 年に 268 エーカーの土地を買収し、53 年夏には統一ビルが建てられた。ビルの片翼は学校が占め、もう片方はプライベート・アパートメントで、ビルの真中には共同食堂が設けられた。コミュニティには数多くの文化人、超名人が集った。コロニーは共同生活を強要することなく、家族生活を守ろうとしたが、

1856年にスプリングスが株式を一人で買い戻し、プライベートカンパニーにしたことでその試みは潰え共同生活的要素は失われてしまった。

「リュニオン・コロニー (REUNION COLONY)」(1855-60)は、1855年にアントワープを離れアメリカに移住した150名のフランス人フーリエ主義者によるコミュニティであった。フランスのユートピア社会主義者コンシデラントが組織化したテキサス植民地のためのヨーロッパ・ソサイエティの援助によって米国にやってきた。1856年に彼らは2階建ての建物を建て、コミュニティキッチン、ダイニングホール、農業が設けられた。しかし、彼らは核家族スタイルを堅持し、共同生活のスタイルを放棄した。1857年には経済的問題が発生し終焉を迎えた。

「シルクヴィル・コロニー (SILKVVILE COLONY)」(1870-92)は、フランスの貴族階級であったアーネスト・デ・ボワゼリー (Ernest de Boissiere) が、1850年代と60年代に米国を訪問。彼は、アルバート・ブリスベン (Albert Brisbane)、エキジャー・グラント (Ekijah Grant)、チャールズ・シアエス (Charles Seaes) と会い、フーリエ・コロニーについて語った。その年、カンサス教育協会から3500エーカーの土地を購入し、コロニーはフーリエ主義と絹製造のコロニーが設立された。1869年に40名のフランスの植民者が必要な労働者として送られた。1870年には、3階建ての住宅が建てられ、150エーカーの土地が耕され、何千もの桑の木が植えられた。しかし、絹製造が採算に合わず、1892年には売却されてしまった。

表 2 社会改良主義型コミユナルリビング（オウエン主義、フリーエ主義）一覧¹⁵

コミュニティ名称	設立	終了	創立者	場所	内容	概要
ニュー・ハーモニー NEW HARMONY	1825	1827	Robert Owen	Wabash River in southwestern Indiana	オウエン系	社会改良主義者ロバート・オウエンの思想に基づき設立されたコミュニティ。ジョージ・ラップの所有していたハーモニー・ソサエティを購入。オウエンの思想に共感を覚えた人たちが集まり、1825年には900名近い人々が集まった。しかし、コミュニティ運営は混乱を極め、1827年にはオウエンはコミュニティを離れ、終焉を迎えた。
イエロー・スプリング・コミュニティ YELLOW SPRINGS COMMUNITY	1825	1827	John Roe	Cincinnati, Yellow Springs, Ohio	オウエン系	オウエンの思想に共鳴したオハイオ州出身のスウェーデン牧師ジョン・ローが始めた宗教実践コミュニティ。裕福で教養高いメンバー中心に75名でスタートしたものの、労働の辛さが原因で崩壊。アメリカにおけるオウエン・コミュニティの最初の失敗となった。
ブルック・ファーム BROOK FIRM	1841	1847	George Ripley	West Roxbury, Massa- chusetts	フリーエ系	1841年にジョージ・リプリーが設立したウィリアム・エリー・チャニング・トランスデンタル・クラブの枝分かれ。作業負担を平等に分担することで余暇活動や知的な追求に十分な時間が利用できるようになると考えた。1843年にフリーエの社会主義思想に大きく感化され、その後はフリーエ思想の実践および普及の場となった。
ノース・アメリカン・フィランクス NORTH AMERICAN PHALANX	1843	1856	a group of Albany	Monmouth County, New Jersey	フリーエ系	Albanyに集まったグループはフリーエ主義者として、ニュージャージー州のレッドバンクの近くに673エーカーの農場を購入。同年の秋に数家族が土地のファームハウスに居を構えた。農業が彼らの主職業であったが、実際の農業経験者はわずかだった。1844年の間、このコロニーのメンバーはフリーエ主義の実践を試みた。
スカネアテルス・コミュニティ SKANEATELES COMMUNITY	1843	1845	John Collins	Onandaga County, New York	フリーエ系	1843年Syracuse地区で何度か開催されたフューチャリスト・フィランクスの改良ミーティングが起源。1843年11月には36人の個人がプロジェクトに賛同し、300エーカーの土地が購入。所有の共同、食肉、麻薬、アルコールの禁止と自由恋愛の哲学を特徴とした。1844年にコロニーはスタートし農業をメインとした。
ラリタン・ベイ・ユニオン RARITAN BAY UNION	1853	1856	North American Phalanxの30 名の反体制メ ンバー	near Perth Amboy, New Jersey	フリーエ系	North American Phalanxよりもより高度な産業、教育、宗教生活を望む人たちがつくった株式会社。リーダーはクオーカー教徒であれ商人でもあった Marcus Spring。1852年に268エーカーの土地が買収され、53年の夏には統一ビルが建てられた。コミュニティには数多くの文化人が集った。
リュニオン・コロニー REUNION COLONY	1855	1860	Victor Considerant	Dallas, Texas	フリーエ系	1855年にアントワープを離れた150名のフランス人フリーエフォロワー。フランスのユートピア社会主義者コンシデラントが組織化したテキサス植民地のためのヨーロッパ・ソサエティの援助によって米国にやってきた。1856年に、彼らは2階建ての建物を建て、コミュニティキッチン、ダイニングホール、農業が設けられた。
シルクビル・コロニー SILKVILE COLONY	1870	1892	Ernest de Boissiere	Williamsburg, Kansa	フリーエ系	フランスの貴族階級であったErnest de Boissiereが、1850年代と60年代に米国を訪問、カンサス教育協会から3500エーカーの土地を購入、フリーエ主義と絹製造のコロニーを設立した。1869年に40名のフランスの植民者が必要な労働者として送られた。

1-5-2.社会改良主義型コミユナルリビングの特徴

「社会改良主義型コミユナルリビング」は、ロバート・オウエンとフリーエの思想を原点とするコミユナルリビングであり、時期としてはす

¹⁵ Robert S. Fogarty (1980) *Dictionary of american communal and utopian history*, Greenwood press

べて 19 世紀内に生まれ、同世紀内にほぼその活動を終了させている。その意味では極めて短期間のブームであったとも言える。

社会改良主義型コミユナルリビングは、宗教的信念に基づいた共同生活体ではなくイデオロギーに基づいた共同生活体であったと言える。資本主義の発達にともなう貧富の差の解消を主目的とし、共同生活を通じ、皆が平等に自立生活できることが目標とされた。共同生産、共同消費といった生活スタイル、節度のある質素な生活スタイルなどの指向については宗教型コミユナルリビングと同一であり、近代化が進みつつある中でも質素は一種の美德として保持された。全員を集団としてまとめる精神的な軸は、教育を通じて養うことが可能と考えられ、コミュニティー内の能力格差は、利他心に基づき平等化の修正によって図ろうとした。

宗教型コミユニナル・リビングが現在もなおいくつか存続しているものがあるのに対し、社会改良主義型は長くても 20 年程度で、殆どわずか数年で活動寿命を終えた。短命であった最も大きな理由は経済問題であった。収入の糧は自足自給農業が目指されたが、知識があり思想的共感を覚え集まった人々ではあったが、農業経験はほぼ素人の人たちも多く、理想に対して内実は空回りであり、実利のある農業生産は適わなかった。また農業に加えて、織物業、印刷業などの軽工業での収入向上も目指されたが、自立採算を維持する程度には至らなかった。

エンゲルスからは、オウエン、フーリエが目指したコミユナルリビングは「ユートピア型社会主義」であると揶揄された。すなわち、資本主義発展の未成熟さに対応し、彼らの理論も未成熟である。そのため新しい社会の成立を歴史発展の必然的結果でなしに、頭のなかで作り上げる必要があったゆえに、彼らの未来社会の構想ははじめから幻想（ユート

ピア) になる運命にあったと指摘されたのである。¹⁶しかし、オウエンが理想とした共同生活の理念はその後、コミユナルリビングとは別に、19世紀半ばのロッチデールを起源とした生産協同組合や生協運動として現在まで引き継がれていった。

1-5-3.多様化する社会改良主義型コミユナルリビング

19世紀後半から20世紀初頭にかけては、市民革命を契機として、基本的人権をはじめとして政治的自由と平等を獲得した市民たちが、より豊かな権利の獲得を求め各種の活動が行われた時代でもあった。

資本主義の進展とともに少数資本家と大多数の労働者の格差の拡大を是正しようとしたものが、前節に見たロバート・オウエンやフーリエの社会改良主義であった。オウエン、フーリエが目指したこれらの動きに続き、19世紀後半には、後のマルクス、エンゲルスによる共産主義活動にも繋がる無政府主義運動なども活発となり、これら思想を反映したコミユナルリビング（共同生活）が継続的に生まれていった。共産主義は、1917年のロシア革命を経て、1922年ロシア連邦の成立により共産主義体制が正式に確立されたが、それ以前の時期において、未成熟と言われたユートピア社会主義同様、いくつかのユートピア共産主義思想に基づいたコミユナルリビングが米国内においても誕生した。

また、一方で資本主義も精緻化が進む中で、株式会社方式や土地資産の共有などのシステムを活用してコミユナルリビングを設立・運営しようとする試みがこの時期、積極的に行われた。

¹⁶ Friedrich Engels (1883) *Die entwicklung des sozialismus von der utopia zur wissenschaft* (エンゲルス 大内兵衛訳 空想より科学へ 岩波書店)

例えば、社会主義思想を反映したコミューナルリビングとしては、社会主義思想に感化され、カリフォルニア州セコイアに集まった「カウエイ・コ・オペラティブ・コモンウェルス (KAWEAH CO=OPERATIVE COMMONWEALTH)」(1885-1892) や、マルクス派社会主義者ジュリアス・ウェイランドの発行する雑誌『The Coming Nation』に共感を示した人々が集った「ラスキン・コーペラティブ・アソシエーション (RUSKIN COOPERATIVE ASSOCIATION)」などがある。また、無政府主義者が教育を目的として立ち上げた「フェリー・コロニー (FERRER COLONY)」(1914-1946)、「ホーム・コロニー (HOME COLONY)」(1898-1909) などのコミュニティもあった。

「コロラド・コ-ポラティヴ・カンパニー (COLORADO COOPWEATIVE COMPANY)」(1894-1910) の本来の設立目的は、灌漑水路の建設にあった。また「コーペラティブ・ブラザーフッド (COOPERATIVE BROTHERHOOD)」(1898-1913) は、株式会社方式で、シアトルの北、キサップ郡で製材事業の運営を担うコミューナルリビングであり、このように見ていくと、社会改良主義型のタイプも 19 世紀末から 20 世紀になると相当多様性を帯びていることが理解できるだろう。

またこれは社会改良型の派生として誕生したユニークなタイプのコミューナルリビングが、フェミニスト・コミュニティである「ウーマンズ・コモンウェルス (WOMEN'S COMMONWEALTH)」(1860-1930) である。このコミュニティは、マーサ・マックワイター (Matha McWhiter) のリーダーシップの下、夫より独立した女性たちによる宗教コミュニティで、約 50 名の女性たちが卵販売や農業経営、ホテル経営などで生計を維持しようとしたコミューナルリビングであった。これは

その後のフェミニズム活動の萌芽とも呼べるものであり、現在のコ・ハウジング型コミューナルリビングにも繋がる動きであるといえよう。

表 3 社会改良主義型コミューナルリビング一覧¹⁷

コミュニティ名称	設立	終了	創立者	場所	内容	概要
ナショバ・コミュニティ NASHOBA COMMUNITY	1826	1827	Frances Wright	Shelby Country,Tennessee	社会改良主義 コミュニティ	スコットランドの社会改良主義者でありフェミニストのFrances Wrightが、1826年にテネシー州Shelby Countyに性と宗教の解放が奴隷制からの開放に繋がると信じて設けた異人種間のコロニー。彼女は植民地者に黒人、白人の差別なく、完全な社会、性的平等を目指したが、コロニーが実現することはなかった。
ホープデール・コミュニティ HOPEDALE COMMUNITY	1842	1887	Adin Ballou	Milford, Massachusetts	社会改良主義 コミュニティ	万人救済論教会のメンバーたちによるキリスト教をより実用化したいと考える改良。隔月刊で「The Practical Christian」誌を発刊。その後殺人、憎悪などの非純潔と酒を自制する友愛コミュニティを結成。子供たちを共通の学校に送り、共同所有する農地を耕した。
フルーツランド FRUITLANDS	1843	1845	Bronson Alcott,Chares Lane,Henry Wright	Harvard,Massachusetts	社会改良主義 コミュニティ	社会改良者のアルcottら、1843年に米国に設けたコミュニティ。衣服、食事、住まいも簡素な特徴を持ち、農業生活に主眼を置いた。住民は鋤で土地を耕し、奴隷によってつくられた綿ではなく麻を身につけ、冷水への入浴療法や果実と穀物だけを食べるグラハム・システムを採用した。彼らは労働者や家畜雇うのを拒否し鋤で土地を耕した
イカリア ICARIA	1848		Etienne Cabet	Fanin Country,Texas	社会改良主義 コミュニティ	元秘密警察社会メンバーであったEtienne Cabetが書いた小冊子「イカリアへの旅」(1840)に影響を受けたメンバーが作ったコミュニティ。フランス政府の迫害がイカリアンを移民にせよと促したが、一方でフランス革命によるルイ・フィリップ公使の失脚や第2共和制の設立がその動きを鈍らせた。1849年には Icarianのメンバーは480人に増加したもののテキサスの生活は相当厳しいものだった。
メンモニア・インスティテュート MEMNONIA INSTITUTE	1856	1857	Thomas Low Nichols,Mary Grove Nichols	Yellow Springs,Ohio	社会改良主義 コミュニティ	Nicholsは世界改良主義者。婦人の権利、フリーラブといった1840年代の多くの社会運動に参加していた。1851年にニューヨークに米国水治療協会を設立、水治療のための教育アカデミーをつくった。1856年に彼らは、イエロー・スプリングスの水治療の施設を借りることが出来、Memonia Instituteを設立した。1986年に営業部門がオープン。施設はなにがしかの形でフリーエの影響を受けていたようだ。しかしコミュニティは、Nicolasがカソリックに改宗したことから終了した。
ジャーマン・コロニゼーション GERMAN COLONIZATION COMPANY	1869	1870	Carl Wulsten	Silver Cliff,Colorado	株式会社共同 コミュニティ	シカゴのドイツ語新聞の編集者、Carl Wulstenによる株式会社。町における貧しいドイツ職人救済を目論見、250ドルの出資で、入植者が生活し東海岸を征服することが出来る経済的協同が可能と考えた。1869年にシルバークリフの近くに場所を見つけ、翌年、特別列車で300人のドイツ人がシカゴからその土地に向かった。簡易住居が建てられ、コロニーガーデンが設けられ、1エーカーの土地が入植者に与えられたが、議会在40万エーカーの土地の増設を認めず、入植者ははっきりとした土地の権利を得ることが出来なかった。9月にはWulstenは辞任し、メンバーは土地を離れていった。
ユニオン・コロニー UNION COLONY	1869	1872	Nathaniel Meeker	Greeley,Colorado	共同土地所有 コミュニティ	当初は共同土地ベンチャーを目指すも、その後個々の土地所有経営を認める。1869年には155ドルのメンバーシップを払った442名のメンバーが集まる。当初は家事の共同化が志向されたが、結果として私有を認め、コロニーは消滅。
ウイメンズ・コモンウェルス WOMEN'S COMMONWEALTH	1860	1930	Matha McWhiter	Belton,Texas	フェミニスト・コ ミュニティ	Matha McWhiterのリーダーシップと信頼により結成された夫より独立した女性による宗教コミュニティ。1879年には約50名の女性が夫から離れ、卵販売で独立して生計を得ようとした。その後、ホテルも複数経営。McWhiterの死後もメンバーにより1930年代まで農業経営を続けた。
ルビー・コロニー RUBY COLONY	1880	1886	Thomas Hughes	Morgan County,Tennessee	キリスト教社会 主義コミュニ ティ	Thomas Hughesは英国の共同の動きに長く関わってきた歴史を持ち、生産的能力を高めるためのセツルメントを設立した。1879年彼を含む何人かのメンバーでまちづくり7千エーカーと3万3千エーカーを農場のために購入、コロニーは1880年10月にオープンした。協会、学校、住宅などが設けられた。1881年イングリッシュ・ビレッジは400人の住人が住み、アクティブな社会クラブやテニストーナメントまで行われた。
シシリー・アイランド・コロニー SICILY ISLAND COLONY	1881	1882	Herman Rosenthal	Sicily Island,Catahoula, Louisiana	ロシア系ユダヤ 人コミュニティ	Israelite universelleとニューヨークのユダヤ人コミティーの援助により、Kievと、Yelisanetgradからニューオリンズ郊外に入植した。彼らはロシアの大量虐殺から抜け出したいと願いロシアから逃げてきたものだった。家族には160エーカーの土地が与えられた。農業に加え、植民者たちは彼らの収入を協力的ベンチャーにより得るための工場と産業を望んだ。彼らは1882年の冬にコロニーにやってきて農業を始めたが熱気やマラリア、ミシシッピ川の氾濫などが彼らを苦しめた。

¹⁷ Robert S. Fogarty (1980) *Dictionary of american communal and utopian history* ,Greenwood press

コミュニティ名称	設立	終了	創業者	場所	内容	概要
ニュー・オデッサ・コミュニティ NEW ODESSA COMMUNITY	1883	1887	William Frey	Glandale Douglas,Oregon	ロシア系社会主義コミュニティ	1881年、ロシアのアレクサンダー二世の任命後、1882年、ユダヤ人に対する迫害と大虐殺が国中に広がった。その期間に2つの移住の動きが起こった。ひとつは、Bilulは、パレスチナへの避難を支援する動き、そしてAm Olamは、米国への移住を指導した。Am Olamグループは1882年オデッサ(ウクライナ)から離れ、社会主義的原則に基づくコロニーのモデルを創設しようとした。彼らが米国に着いたとき、Michael Hejprinが土地購入や移動のための資金を提供した。
トポロバンポ・ベイ・コロニー TOPOLOBANPO BAY COLONY	1884	1899	Albert Kimsey Owen	Topolobampo Bay on the west coast of Mexico	鉄道コミュニティ	1884年にテキサスから鉄道路線が敷かれたことに端を発して創設されたコロニー。自給自足都市の創設が目指されたものの資金がショートし1899年には最終的に消滅した。
KAWEAH CO-OPERATIVE COMMONWEALTH	1885	1892	James J.Martin and Burnette Haskell	Tuare,California	社会主義コミュニティ	Laurence Gronlundの『Cooperative Commonwealth(1884)が、サンフランシスコの労働者リーダーや社会主義者に読まれたことが契機となった。1884年11月のミーティングで68名の個人が『Cooperative Land Purchase』と『Colonization Association of California』を組織化した。1885年組織の53名がサンフランシスコから Visalia land officeに行き、新しく開発されたセコイアの森の地域の所有を主張し、その土地をKawahと名付けた。1885年から91年の間に150人の移民者は400名となった。
アルチュリア ALTRURIA	1894	1895	Biron Payne	Fountain Gove,Sooma Country,Californi a	キリスト教社会主義コミュニティ	1894年、エドワード・バイロン・ペイン統一教会の大臣とサンタローザ近郊の30人の信者によって設立されたコロニー。ウィリアムズ・ディーン・ホウルズの小説「オルチュリアからの旅行者(1984)」に影響を受けたもので、彼らはキリスト教社会主義グループを形成した。彼らの多くはPayne統一教会のメンバー。理想的な共同生活を志向したものの、財政問題が早々に表面化、翌年にはコロニーは消滅し、3つのスモールユニットに分裂した。
コロラド・コーポラティブ・カンパニー COLORADO COOPWEATIVE COMPANY	1894	1910	不明	Montrose County,Colorado	水資源共有コミュニティ	コロラド・コーポラティブ・カンパニーの本来の設立目的は、灌漑水路の建設にあった。しかし、創業者はそれ以上の理想、すなわち社会および知的水準の高い状態における維持と物質的平等性を目的としてコロニーを設立。メンバーは、最低100ドルの株の購入と引き換えに投票権利と灌漑終了後の水の権利を得た。土地所有は私有制であり、一部のメンバーから反対が唱えられたがそれは一部に留まった。1910年にはプロジェクトは終了し、スクラ・タウン・インブルーメント・カンパニーというタウン・カンパニーに引き継がれた。
ラスキン・コーポラティブ・アソシエーション RUSKIN COOPERATIVE ASSOCIATION	1894	1901	Julius Wayland	Cave Mills,Dickinson County,Tennessee	マルクス派社会主義コミュニティ	1893年にWaylandは、彼の発行する雑誌、The Coming Nationに購読者が10万を越えれば収益をコロニーの創設に寄付すると宣言。コロニー参加には家族当たり500ドルの寄付が求められたが、1893年の不況もあり、多くの家族がニュー・イングランドのミルズタウンにやってきた。最初の土地は不毛だったが、二番目のCave Millは800エーカーあった。コロニーの主要産業は広く全国に購読者を持つThe Coming Nationの発行だった。最も最良の年には、約200名の植民地者が32の住宅を作り、共同ダイニングホール、病院、劇場をつくった。
フェアホープ FAIRHOPE	1895	現存	Henry George	Fairhope,Alabama	単一税コミュニティ	North American Phalanxよりもより高度な産業、教育、宗教生活を望む人たちがつくった株式会社。リーダーはクオーカー教徒であれ商人でもあった Marcus Spring。1852年に268エーカーの土地が買収され、53年の夏には統一ビルが建てられた。片翼には学校が占め、もう片方はプライベート・アパートメントデ、ビルの真ん中には共同食堂が設けられた。コミュニティには数多くの文化人、超名人が集った。コロニーは共同生活を強要したりすることなく、家族生活を守ろうとしたが、1856年にSpringが
クリスチャン・コモンウェルス・コロニー CHRISTIAN COMMONWEALTH COLONY	1896	1990	Howard Gibson,Ralph Albertson	Muskogee Country,Georgia	キリスト教社会主義コミュニティ	キリスト教社会主義メンバーによるコミュニティ。クリスチャン・コーポレーションを組織化していたギブソンと、ウィラード・コロニーのメンバーであったアルバートソンが、社会主義雑誌キングダムでコロニー創出メンバーを募集し、集まったのがきっかけ。その2つのコロニーが合併し、1896年にクリスチャン・コモンウェルス・コロニーが誕生。1899年には95名のメンバーとなる。定期刊行誌「ソーシャル・ゴスペル」を発刊し、タオル製造業や印刷業にも着手。しかし、オープンマインドな運営方針が仇となり、1900年には資金援助を受けていたライト・リレーション・リーグ社の自主財産管理下に置かれる。
コーポラティブ・ブラザーフット COOPERATIVE BROTHERHOOD	1898	1913	Social Democracy of America	Kitsap County,Seattle	株式会社による共同生活、共同生産コミュニティ	SDA(Social Democracy of America)の植民地委員会の分派として設立されたもの。この組織は、所有、物流、製品製造の協同化を目指して設立されたものだが、株式会社として設立されたため、実際のコロニー・メンバーには発言権は与えられなかった。1898年に16人のメンバーがシアトルの北、キヤップ郡に移住した。土地の整地やニューズレターを出版するコー・オペレーターが実際の製材事業の運営を担った。彼らはタイム・チェック・システムを使い、自らの関心事に関するニュースを発行した。共同生活は独身者のみで行われたが、食事は全員が一緒に取った。その後、1906年には共同化は放棄され、1913年には自主財産下に置かれた。

コミュニティ名称	設立	終了	創立者	場所	内容	概要
ホーム・コロニー HOME COLONY	1898	1909	Puget Sound	Joe's Bay	無政府主義 コミュニティ	無政府主義者にてであったPuget Soundが、以前あったBallamy colonyの失敗を受けて設立したコミュニティ。当初は、共同のコロニーというよりは、個人のコロニーとしての生活が強かった。当初40名のメンバーは1906年には155名となった。コロニーでは、アナキストの週刊紙「Discontent:Mother of Progress」を発刊した。個人主義コロニーは、その後徐々に共同的要素を付加。1902年には共同店舗を、いくつかのコミュニティの建設は共同で行われた。自由なスピーチ、自由恋愛、自由発想などが奨励された。1909年に所有の個人制を認め、次第に共同コロニーの性格は失われたが、アナキストのアジトの性格は続いていった。
ストレイト・エッジ。インダストリアル・セツルメント STRAIGHT EDGE INDUSTRIAL SETTLEMENT	1899	1918	Wilbur F.Copeland	Alpine,New Jersey	コーポラティブ・ビジネス・バンチャー	1899年にWilbur F.CopelandがNew York Cityにコーポラティブ・ビジネス・バンチャーとして設立し、後にはAlpine,New Jerseyにワーカーズ・レジデンスを設立した。グループは、名前をイエスが木工であったことにちなみ名付けられた。メンバーは、グループを“School of Methods for the Application of the Teaching of Jusus to Business and Society”と名付け、コミュニティ産業としてパン屋、印刷業、The Straight Edgeと呼ばれる定期刊行物を発行した。1906年に彼らは4エーカーの土地を購入し、STRAIGHT EDGE INDUSTRIAL SETTLEMENTの家をニュージャージーに建て、労働者の子供たちのためのプレイ・ワークスクールを建てた。
ヘルコン・ホール・コロニー HELICON HALL COLONY	1906	1907	Upton Sinclair	Englewood,New Jersey	実験コミュニティ	1906年に小説家シンクレアは、New York Inpeant誌に“奴隷問題”を解決するためにコロニーを創設し、共同住宅や協力的な協団体の実現のアウトラインを執筆。シンクレアは、以前男子校であった施設を購入し、構想を実現したが、翌年には火災が発生し、コロニーは終わりを迎えた。
リトル・ランダース・コロニー LITTLE LANDERS COLONY	1909	1915	William E.Smythe	San Ysidro in the Tiajuana Valley,San Diego	地開発コミュニティ	Smytheは、広大な土地を共同で購入し、灌漑し、小分けにすれば、生産的になると考え、1909年にSan Ysidroに120エーカーの土地に12家族が住み着いた。その後、1913年には300家族が住むに至り、他のコロニーも創設されたものの、土地所有の規模が小さく収益性に欠け、1915年の洪水が主なコロニーを破壊してしまった。
サンライズ・コミュニティ SUNRISE COMMUNITY	1932	1936	Joseph Cohen	Saginaw,Michigan	コレクティブ・コーポラティブ・コロニー	1932年にJoseph Cohen が Saginaw,Michigan に創立、コミュニティの当初の住民はニューヨーク・シティからのユダヤ人の無政府主義者たちであった。彼は長年出版社としてのキャリアがあり、1932年には無政府主義ジャーナル、Freie Arbeiter Stimmeの編集長であった。彼は、大恐慌の解決策としてのコーポラティブ・リビングを見て、1933年にはコロニーの目論見書であるA Project for a Collectivist Cooperative Colonyを発行し、全米からの興味喚起を目指した。1933年にCohenは1万エーカーのワーキング・ファームを購入した。
サンライズ・ヒル SUNRISE HILL	1966	?	Ralph Borsodi	Greenfield,Massachusetts	共同土地所有 コミュニティ	メリーランドで開催された「暮らしの学校」会議で共鳴したコミュニティ形成に興味を持ち、Ralph Borsodiによって提唱された自営型分権農地に興味を持った個人メンバーが設立したコミュニティ。1参加者は40エーカーの土地をコミュニティに提供し、数ヶ月の協議後、20名の個人がコロニーをスタートさせた。サイトは、Greenfield近くのDeerfield River Valleyにあり、9つの部屋を持つ建物といくつかの農業施設が設けられた。1966年の夏、最初のメンバーたちがやってきて、ある参加者は彼らを「美しい人々の集合」と呼んだ。グループは、性的自由、集団瞑想、イデオロギーのない集団決定をモットーとした。
ツイン・オークス TWIN OAKS	1967	2020		Louisa, Virginia	心理学ベース 実験コミュニティ	心理学者スキナー氏の理論を実践したいと考えた8名のメンバーが、123エーカーの土地を所有しスタート。当初は農業経営から、その後はハンモック製作やビジターフィーで共同生活を成立させている。独自のコミュニティ・ルールを生み出し、現在まで続くコミュニティ。
フェリー・コロニー FERRER COLONY	1914	1946	Harry Kelly,Joseph Cohen,Leonald Abbott	Stelton,New Jersey	無政府主義・教育コミュニティ	Harry Kelly,Joseph Cohen,Leonald Abbottによる無政府主義者コミュニティ。Ferrerの名前は、スペインの自由思想、無政府主義者Francisco Ferrerにちなむもの。彼らは、カルチャー・センター、イブニング・スクール、実験的デイスクールをニューヨークに設立。当初はロウワー・イーストサイドにあったが、その後ニュージャージーに移り、90世帯の住宅を建て、120名の子供たちが学校に通った。コロニーでは積極的な社会生活が営まれ、イブニング・レクチャー、共同ディナー、フォークダンスなどが行われた。近隣のセトルメントとともにフェロウシップ・ファームという協同店舗も経営された。フェリー・コロニーは無政府主義者、社会主義者、共産主義者が混ざり合い、20年以上も続いた不思議なコミュニティだった。

1-6-1. キブツ型コミユナルリビング

社会改良主義型コミユナルリビングの別タイプツとして、米国ではなく、イスラエルで独自に発達したコミユナルリビングがキブツである。キブツは、ヘブライ語で「集団」を意味する。

イスラエルでキブツが誕生したのは20世紀初頭のことである。キブツが生まれた理由については、アミア・リブリッヒ（1993）『キブツ その素顔』¹⁸によると、①19世紀後半のロシア、東欧におけるユダヤ人迫害の動き、②シオニズムと当時のヨーロッパに台頭したマルクス主義、ナロードニキ（ロシアに生まれた農本主義的な急進思想）、トルストイの描いた理想農村主義の影響、③当時のパレスチナにおけるユダヤ人のおかれていた困難な状況を背景として、シオニズム（国家再建）を進める政治運動の中心組織として、1897年にシオニスト機構が発足。開拓のためにパレスチナ事務局が設置され、1909年、シオニスト機構の下部組織ユダヤ民族基金が購入した土地で、優秀な青年労働者7人を1年契約で自主的に開拓させるという実験が試みられたという。

この成功を機に、新たな労働者を募集し、入植した後の農業管理を彼らに委譲し、定住の権利を与えるという大胆な条件も加えられるようになった。これが最初のキブツの原型となった。

どのキブツも果樹園、小麦畑、綿畑などの広大な農場に囲まれており、その中に生活区域が一カ所にまとまった形になっている。生活区域の中心には大きな食堂があり、その近くに事務所、診療所、郵便局、売店、図書館、娯楽談話室、洗濯場、衣料庫などの共同施設、さらにメン

¹⁸ Amia Leiblich (1981) *Kibbutz makom* Pantheon Books (アミア・リブリッヒ キブツ その素顔 ミルトス)

バーの個人住宅、子供達の家、学校などが散らばっている。また、立派な劇場、美術館、体育館をもったキブツもある。

現在、約 300 弱のキブツがイスラエル国内に散在しており、ひとつのキブツの大きさは人口 50 人から 2 千人近い規模までさまざまに平均 500～700 人である。キブツ総人口は約 13 万人（1990 年現在）であり、イスラエル人口の約 3%にあたる。

1-6-2.キブツの運営原則

キブツの運営原則としては、以下の点が挙げられている。①集団による所有：土地、生産手段、建物などの基本財産は、すべて集団による共有。メンバーの私有は限定されているが、近年は徐々に一部の私有制が認められるように修正される傾向にある。②集団による生産と労働：生産計画は専門の委員会によって立案され、総会の承認で実行に移される。必要な労働力の配分は、労働委員会や労働調整係によって配分、決定される。③集団によるサービスと消費：個人家庭においては普通の主婦の仕事とされる炊事や洗濯などの家事も、すべて集団によってなされる。④共同教育：子供の養育と教育も共同体全体の責任になっている。⑤直接民主主義：キブツの最高意思決定機関は、メンバー全員の参加による総会で、重要な議案、個人の進路選択もこの場の総意に基づいて決定される。

キブツの評価として、以下の点が挙げられている。

①貧富の差のない社会：労働、住宅、医療（社会保障）、教育などは平等に保障されており、貧富の差はない。個人的な買い物、旅行などのために一定の金額が個人に割り当てて支給される。②労働価値の平等：頭脳労働と肉体労働の間に地位や対価の差別は無く、すべての労働は等

しく評価される。③男女の平等：女性も男性と同じく一日八時間の労働を義務づけられる。女性はキブツのほとんどの職場に進出して責任ある地位に就いているケースも多い。④終身社会保障：メンバーの一生と各メンバーの両親の老後はキブツが保障している。病気や事故により働くことが出来ない身体になったとしても生活と看護はキブツによって保障される。老人の社会参加も保障される。⑤共同教育の成果：教育の平等が実現され、18歳になるまでは全く平等な保育、教育の場が与えられている。⑥高い生産性と経済効率：消費・サービス部門の協同化によって経済面の合理化も達成している。例えば家電製品も各住戸に導入する代わりに、全体で大型な設備を備えればいい。食料や日用品の購入も無駄がない。一般家庭では生み出すことの難しい女性の労働力を、保育施設、調理場、洗濯場などによる家事の解放をして、合理的に活用している。⑦自然と人に恵まれた環境：自然環境に恵まれ、騒音や排気ガスや車の危険に悩まされることのない静かな生活に包まれ、果樹園や野原への散策は人々の日常の中に根付いている。

1-6-3.現在のキブツ

1990年に冷戦構造は終結を向かえたが、キブツは思想背景から離れたかたちで現在も機能している。当初は、農業を中心とする共同体であったが、その後、工業へのシフトが進められた。また、子供は親元から離し、集団で育てる家や財産も含めた完全な共有制といった厳格なスタイルから、私有化もゆるやかに導入し、私有化された家で親子同居スタイルが現在の主流になりつつあるという。

現在、キブツの数は282を数え、人口は近年増加傾向で17万人を越えるという。（全国団体「キブツ運動」などによる）近年のイスラエル

は、サイバーセキュリティ技術、軍事技術を中心に世界の最先端技術保有国として知られているが、キブツの中にも、そのような先端中核技術を保有している組織があるという。

少量の水で植物を栽培する「点滴灌漑」技術を保有するネタファム社は、キブツ・ハツェリム発祥。世界 180 の企業や政府機関のシステム防衛を請け負うササ・ソフトウェア社はキブツ・ササから生まれた。

このような先端技術が生まれる土壌がキブツ由来なのかどうかは不明であるが、共同生活を送る上で生まれる「暮らしやすさ」が、現在でもキブツに入りたいと考える人々を生んでいるようであり、その結果として高い技術を保有する人々をキブツで仲間化できているのかもしれない。オウエン、フーリエを起点として指向された万人が平等に暮らすことの出来る共同生活体は、共産主義が崩壊した今、実質的にキブツとしてのみ生き残っているのだと言えよう。

1-7.スピリチュアル型コミューナルリビング

20世紀に入ると宗教型コミューナルリビングや社会改良型コミューナルリビングは減少し、代わって生まれてきたのが、独特の精神世界への傾倒や終末思想を元に共同生活を始める動きであった。こうした萌芽は1960年代になると、体制への反旗を翻す当時の若者を中心としたヒッピー・カルチャーやインド哲学への興味と結びつきスピリチュアル型コミュニティ・リビングを各地に生み出していった。

「ドロップ・シティ (DROP CITY)」 (1965-1973)や「モーニング・スター (MORNING STAR)」 (1966-1972) は、ヒッピー・コミュニティの代表事例である。ドロップ・シティは1965年にカンサス大学とコ

コロラド大学の学生がコロラド州南東のトリンダッド (Teindad) に7エーカーの土地を購入したことから始まる。彼らの目的はアラン・カプロードの”ハプニングス” (ドロップ・アートと同義) で生計を建てることであった。ハプニングスは、ジョン・ケージ、ロバート・ラウシェンバーク、バックミンスター・フラワーなどがブラック・マウンテン・カレッジで行った即行パフォーマンスに端を発するものだった。この計画に賛同する人々が全世界から集まり、賛同者たちによってバックミンスター・フラワー・ドームが建設された。また別メンバーにより東洋思想、アヴァンギャルド・アート、サイケデリック・アートなどが持ち込まれ、この地は新しいカルチャー・ムーブメントの聖地となったが、運営を司る39名のメンバーには、コミュニティ運営を維持するリーダーシップも意志もなく1973年にドロップ・シティは消滅した。「モーニング・スター (MORNING STAR)」は、ミュージシャン、レオ・ゲットリーブが、彼の別荘をフリー・コミュニティとして解放したものの、一時はヒッピー・コミュニティとして問題化されたものの、ダム、水車、共同購入などの仕組みを持ち込んだ運営が一時期なされたが、72年に土地は売却されてしまった。

「アナンダ・コーペラティヴ・ビラ (ANANDA COOPERATIVE VILLA)」 (1967-現存) 「ラマ・ファウンデーション (LAMA FOUNDATION)」 (1967-現存) は、ともにインド宗教、瞑想を目的として設立されたコミューナルリビングで今も活動が続けられている。アナンダ・コーペラティヴ・ビラは、「自己実現の教え」の布教を目的とするパラマハンサ・ヨガナンダによるコミュニティ。現在2つのコミュニティが存在し、ひとつは農場。もうひとつは瞑想の隠れ家となっている。メンバーは基本的に独身者が中心である。

ラマ・ファウンデーションは、1967年に Steve Dutrkee とニューヨークのアーティスト集団が精神と環境価値に基づくコミュニティを創設することを計画したことに端を発する。1967年に Taos に 115 エーカーの土地を購入。翌年、Lama 基金を創設した。それ以来、この精神コミュニティは着実に成長し、学校、ビジターのための定期的なセミナー、出版工房などを持つようになった。1969年には元ハーバード大学の教授で後に、ババ・ラム・ダス（Baba Ram Dass）と名乗るリチャード・アルパート（Richard Alpert）が、瞑想アシュラム（すみか）を始めてから、この影響は大きくコミュニティに広がった。共同労働なども行われるが、コミュニティの主眼は瞑想を通じて高い精神状態を得ることに移っていった。現在においても、このコミュニティは自給しており、来訪者に対して数多くの教育プログラムを提供している。

このようなスピリチュアル型コミューナルリビングは、しばしば映画の中にも登場している。ピーター・フォンダ主演『イージーライダー』（1969）では、バイクにまたがりロサンゼルスからニューオーリンズを目指す、途中でヒッチハイカーを乗せ、彼が暮らすコミューンに立ち寄るが、そこではドラッグやセックスに対するフリーダムな環境、一方で怠惰とも言える環境がそこには描かれていた。

表 4 スピリチュアル型コミユナルリビング一覧¹⁹

コミュニティ名称	設立	終了	創立者	場所	内容	概要
オネダ・コミュニティ ONEDA COMMUNITY	1848	1880	John Humphrey Noyes	Oneida Creek, New York	宗教コミュニ ティ	1848年にJohn Humphrey Noyes によってSyracuseから20マイル東のOneida Creek, New Yorkに創立された。キリスト教の共産思想に基づき、物品共有とフリーラブと名付けられたセックス哲学を特徴とした。(鳥獣などを捕らえるわなや、絹製品、園芸作物などを販売して組織を維持した。1870年代に始まった銀食器産業は繁栄の基盤となった。
ドメイン・ハーモニア・キン トン・コミュニティ DOMAIN HARMONIA KINTONE COMMUNITY THE ASSOCIATION OF BENEFICENTS	1853	1859	John Murray Spear	Kiantone, Chatauq ua County, New York	精神主義 コミュニティ	1850年に精神主義者キアントン・ブラックスミスがトランス状態で田舎の泉の周辺が完全なフリー・ラヴ実践の地であるという啓示を得て創設されたコミュニティ。当初は、夏の間だけのコミュニオンとして機能した。20名から40名の精神主義者がメンバーとなった。結婚や家族の関係を捨てることや、女性を個人として完全な自由な状態とし、社会を完璧で秩序ある社会とすると説いた。
ブラザーフッド・オブ・ニュー ライフ BROTHERHOOD OF NEW LIFE	1861	1900	Thomas Lake Harris	Wassaic, Duchess Country, New York	精神主義/神 秘主義 コミュニティ	精神主義、神秘主義者であるトーマス・レイク・ハリスが設立したコロニーのひとつ。最初のコロニーは1851年にバージニア州に前エデンの園の信仰者とともにマウンテン・ケープという名称で設立。その後、独自の教義を築き上げ、1861年に2番目のコロニーとしてブラザーフッド・オブ・ニュー・ライフを設け移住した。その後も、いくつかのコロニーを設立した。
ポイント・ロマ POINT LOMA	1898	1942	Katherine Tingley	Point Loma, California	神哲学コミュニ ティ	1898年に Katherine Tingleyが自らの保有する土地に招いたメンバーから始まったコミュニティ。1910年には500名となった。多くは教養高く本気で神哲学に取り組む人々、加えて子供を精神的にも心理的にも精神的に鍛えるRaja-Yogaスクールに参加した人々だった。仲間意識と共同が強調され、子供たちは幼い頃から絵画と音楽の指導が成された。メンバーは参加費用で500ドル払い、労働に対する報酬は無かった。Tingleyはコロニーを厳しく運営した、1929年の彼女の死後、Gottfried de Pruckerが運営を託されたが、負債が膨らみ、1942年にソサイエティはCovina, Californiaに移住した。
ヘブン・シティ HEAVEN CITY	1923	1927	Albert J. Moore	Harvard, Illinois	終末思想 コミュニティ	1923年にムーアは、23年から世界が崩壊し、27年に世界は終わり、新しい夜明けが訪れると予言した。それ故、人類が地球上で資産を防御するための宗教的コロニーが必要と語り、130エーカーの土地、36名で開始した。各家族はそれぞれの土地を持ったが、料理と家事は共同化した。「自らのことを成せ、しからば他社が調整し、協力してくれる」というのがモット。居住者たちは、フローベールとモンテッソーロ・メソッドに基づく学校も保有した。
ドロップ・シティ DROP CITY	1965	1973	不明	Trinidad, Colorado	ヒッピー コミュニティ	1965年に若いアーティストたちにより創設されたコミュニティ。当初のメンバーはフリー・ドームへの居住を目的とするものだったが、そこに別のメンバーが、東洋思想、アヴァンギャルド・アート、サイケデリック・ドラッグなどを持ち込んだ。彼らは新しいカルチャー・ムーブメントの宣教者となり、1967年には「ドロップ・シティ・ジョイ・ムーブメント」を開催、何千人ものヒッピーがこの地に集まった。39名のメンバーが集まったが、コミュニティを維持するリーダーシップも意思もなく、1973年にドロップシティは消滅した。
モーニング・スター MORNING STAR	1966	1972	Leo Gottlieb	Occidental, Sonoma County, California	ヒッピー コミュニティ	Gottliebはフォークグループのミュージシャン。60年代初期、LSD、インディアン神秘主義、共同生活に興味を持ち、彼の別荘をヒッピーのためのフリーコミュニティとした。1967年に何百人ものヒッピーが来たときは、Gottliebは地域のヘルス・コードを犯したとして逮捕された。警察やFBIはこのコロニーをアナキストのすみかと思したが、コロニーは安定する兆しも見せず、ダム、水車、共同購入の仕組みなどが1972年には出来たものの、1972年にはBill Wheelerの相続によりこの土地は売却され、住民は他のコミュニティに移動するか、ニューメキシコのTaosにモーニングスター・イーストを設けた。
アナンダ・コーオペラティブ・ビ レッジ ANANDA COOPERATIVE VILLAGE	1967	2020	Swami Kriyananda	Nevada city, California	ヨガ・コミュニ ティ	「自己実現の教え」の布教を目的とするパラマハンサ・ヨガナダによるコミュニティ。現在2つのコミュニティがあり、ひとつは農場。もうひとつは瞑想の隠れ家。メンバーは独身者が中心。

¹⁹ Robert S. Fogarty (1980) *Dictionary of american communal and utopian history*, Greenwood press

コミュニティ名称	設立	終了	創立者	場所	内容	概要
ラマ・ファンデーション LAMA FOUNDATION	1967	2020	Steve Durkee	Taos New Mexico	ヨガ・コミュニティ	1967年にSteve Durkeeとニューヨークのアーティスト集団が精神と環境価値に基づくコミュニティを創設することを計画。1967年にTaosに115エーカーの土地を購入。翌年、Lama基金を創設した。それ以来、この精神コミュニティは着実に成長し、学校、ビジターのための定期的なセミナー、出版工房などを持つようになった。1969年には元ハーバード大学の教授で後に、Baba Ram Dassと名乗るRichard Alpertが、瞑想アシュラム(すみか)を始めてから、この影響は大きくコミュニティに広がった。共同労働なども行われるが、コミュニティの主眼は瞑想を通じて高い精神状態を得ることにコミュニティの目的は移っていった。1973年でこのコミュニティは自給しており、来訪者にたいして数多くの教育プログラムを提供している。
ピープルス・テンプル PEOPLE'S TEMPLE	1977	1978	James "Jim" Jones	Guyana	カルト宗教コミュニティ	People's Templeは1977年にGuyanaで創設。グループは、1953年にJames "Jim" Jonesによってインディアナポリスで創設されたCristian Assembly of God Churchに起源を持つ。1963年に教会はPeople's Templeと名前を変え、ジョーンズがインディアナポリス議会で1967年に核による虐殺が1967年に起こるとアナウンスした後、70家族が1966年にカリフォルニア州Ukiahから再移住してくるまで、その名前を維持した。1970年に彼らはロサンゼルスとサンフランシスコで教会を購入。そこでジョーンズはインナー・シティの黒人と過激な白人の信者を得たが、彼らはテンプルの活動を次第に社会改良に導いていった。1977年には、約5000人のメンバーとなり、教会は南アメリカのギヤナにミッションスクールを持った。1977年に、900名の会衆がギヤナの郊外に移住し、共同生活をスタートさせた。メンバーは、彼らの資産をコロニーに供出し、Jonesの説教を絶対的真理と見なし、彼ら自身をジョーンズの意思に従うものとした。

1 - 8 .コハウジング型 コミュナルリビング

前節までのコミューナルリビング諸類型は主に米国において起こったものであったが、本節で紹介するコハウジング (co-housing) (もしくは、コーポラティブ・ハウジング (cooperative housing) と呼ばれる共同生活の動きは、デンマーク・スウェーデンなど北欧に起源を持つ動きである。宗教型コミューナルリビングから精神型コミューナルリビングに至るまでの諸タイプは、自らの信仰心を維持すること、人々が平等であるための暮らしのあり方など、ある種のアイデア (理想) を唱えるリーダーの元に人々が集い、その理想を維持するための手段としてコミューナルリビングを結成するものであった。これらコミューナルリビングに参集した人のなかには、過去の住まいや職業、場合によっては家族からも決別してきた人も多い。

コハウジング型コミューナルリビングは、既存の生活を捨てて集うというよりは、既存の生活のさまざまな不便や困難を解消するために集う、

という言い方がより相応しい。コハウジング型コミユナルリビングは、多数の異家族が同一地区に住まい、生活の一部を共同化しようとする試みである。日本でも前近代の村落共同体においては同様の試みが行われていたが、コ・ハウジング型コミユナルリビングはある意味でこれを現代に復活させようとする試みである。最初のコ・ハウジング型コミユナルリビングが誕生したのは、1972年デンマーク、コペンハーゲンの郊外においてであった。北欧から始まったこのコハウジングの動きは、欧州に広がると同時に米国においても広がりを見せている。また日本においても、まだその数は多くはないが実例が生まれている。

デンマークで最初にコハウジング型コミユナルリビングのコンセプトが生まれたのは1962年のことである。アイデアの創設者は建築家のヤン・グドマンド・ホイヤー（Jan Gudmand-Hoyer）。5人の友人たちと、工業化社会の病理の解毒剤となる住まい方、人間のニーズを満たす住まい方、楽しいコミュニティ形成を反映させる住まい方のあり方について議論した。彼は、人間は「働く人間」から「活動する人間」になるべきだと主張し、それは「活動」の諸要素をわれわれの「機能に囚われてしまった文化」に再導入することであると彼は語った。

住宅プログラムは、住民たちの社会的な相互作用をエンカレッジするようにデザインされるべきであり、それは「人々の為に」なされるのではなく、「人々とともに」なされるべきである。こうした思想に基づき、最初のコハウジング型住宅のコンセプト、すなわち「互助（協力）を前提としたコミュニティ。居住部分はある程度小さくても十分で、拡張されたリビングルームとしてのコモン・エリアを使うことでお互いを知り、快適性を感じれば良い」という合意が形成された。

こうしたコンセプトに基いたコミューナルリビングは、当初 1966 年コペンハーゲン郊外のハレスコフにオープンを計画したが、近隣住民の反対に遭い挫折。その後、紆余曲折を経て、1970 年から 73 年にかけてコペンハーゲン郊外の 2 カ所に最初のコハウジング型コミューナルリビングが開設した。

コハウジング型コミューナルリビングがこの時代に登場してきた時代背景としてあげられるのが、都市化と共に進む家族構成や世帯関係の変化である。3 世代家族から核家族に、単身世帯の増加は先進諸国に共通の現象である。こうした家族が何らかの生活上の困難に遭遇した際、近隣に両親や親類のいないものは助けを求めるべき手立てがなく、解決不能な問題に直面する。同様に、共稼ぎ世帯は子育ての困難に直面している。こうした、家族や世帯に起こる日常の不便や困難を、同じ困難を抱える人が共に暮らすことで、互助の仕組みを構築しようとするのがコハウジング型コミューナルリビングである。

この仕組みのユニークな点は、上記問題の解決を、彼らが住まう集合住宅の建築デザインによって図ろうとしたところである。すなわち、個別に住まう世帯をつなぐ紐帯の役割を「コモン・ハウス」に求め、そこには、大人数で利用できる共有キッチン&ダイニングや子供のためのプレイルーム、木工などの仕事場、ゲストルーム、洗濯場などの施設を設置し、共同使用することにより居住者間の社会関係資本の強化を図ろうとしたところにある。どのような共有施設が必要かに関しては、設計段階から関心を持つ人が集い、協議を行うケースもある。居住者による会合により、定期的に皆で集まる食事の機会を設けたり、施設管理に関す

る役割分担を設け、コミユナルリビングの規律を守ろうとするのである。

またコミユナルリビングのバリエーションとして、高齢者を対象としたコーポレート・ハウジングなども生まれている²⁰。

1-9. リタイアメント型コミユナルリビング

リタイアメント型コミユナルリビングは、高齢者を対象とした住宅コミュニティもしくは複合住宅であり、一般的には自立型であるが、中には介護ケアを行っているところもある。加えて様々な活用や社会参加の機会が与えられている。コミュニティ入居には一定の年齢以上という年齢制限が加えられているところが殆どであり、コミュニティではサービスや各種アメニティが提供される。リタイアメント型コミユナルリビングは、タイプにより、「アシステッド・リビング」「コングリゲート・ハウジング」「コンティニューイング・ケア・リタイアメント・コミュニティ」「シニア・コハウジング」「インデペンダント・シニア・リビング・コミュニティ」「レジャー・オリエンテッド・コミュニティ (LORC)」「モバイル・ホーム」などに分類できる。

リタイアメント型コミユナルリビングの多くは、民間会社による運営であり、共同生活は営まれるものの、それらの多くのサービスは介護スタッフや職員による提供が中心であり、これ以外のコミユナルリビングのタイプとは大分異なっている。

²⁰ Kythryn McCamant and Charles durrett (2011) *Creating cohousing building susutainable communities*, new society publisers

住宅面の特徴としては、車椅子や要介護状態となっても使いやすい居室デザインや洗面所、バスユニットの採用など、各種のユニバーサル・デザインの採用を特徴としてあげることができるだろう。

宗教型や社会改良型が信仰上の理由やイデオロギーにより集結したのに対し、リタイアメント型はその名に表される通り、高齢期特有の加齢に伴う日常生活上の困難性の補完を目的として共同生活が営まれる。その意味において、共同生活を行うことに対する必然性は、スタッフによる高齢者への生活補助や提供介護サービスの効率運営がまずその目的にある。もちろん同世代高齢者が集うことによるコミュニケーション上のメリット（ゲマインシャフトの形成）も挙げられるだろうが、それが第一優先事項とはなっていない。

第2章 ロバート・オウエン「ニュー・ハーモニー」の検討

2-1.ロバート・オウエン「ニュー・ハーモニー」誕生の経緯

前章では、社会改良主義型コミユナルリビングの諸類型をみたが、本章においてはそれらタイプの原型ともなったロバート・オウエン

(Robert Owen,1771-1858) によるコミュニティ、ニュー・ハーモニーの内容をやや詳しく見ていくことにする。1825年に米国インディアナ州で誕生したニュー・ハーモニーは、宗教由来ではなく、平等で理想的な生活・労働・教育環境の実現を目的に開設された世界初の実践型コミユナルリビングであった。しかし、当初の壮大な構想とは裏腹に種々の問題が生じ、ニュー・ハーモニーはわずか3年でその幕を閉じることになる。

しかし、わずか3年とは言え、実際に生活の共同が一時的にでも実現したのである。ロバート・オウエンがニュー・ハーモニーで目指したコミュニティはどのようなものであったか、その姿をまず辿ってみる。

オウエンは、少年期より実業の世界で鍛錬を重ね、若い頃から商人として頭角を現していった。オウエンが活躍する当時のイギリスは、ジェームス・ワットによる蒸気機関の発明を契機とする第一次産業革命がまさに進行する時代であった。オウエンは革命の中心産業であった繊維産業分野で能力を発揮した。当初は生地販売卸・小売商として、その後は紡績工場支配人および経営者として、大いに手腕を発揮し事業的成功をおさめる。

一方、紡績工場の経営を通じ、オウエンは各種の経営改革アイデアを構想、積極的に自らの事業に取り入れていった。経営改革を実践したのは、単なる利潤追求ではなく、労働者の生活全般を見直して、新しい人間形成が実現できる工場にしたいという想いに基づくものであった。改革アイデアは、1800年から28年間、彼が経営した1,700名の従業員をかかえるニュー・ラナアック工場で遺憾なく発揮された。

この時期におけるオウエンの改革の内容は主に、教育分野と共同分野に大別できる。教育については、ラナアック工場労働の子供たちに対し、幼児教育から成人教育（20歳まで）まで無償で提供された。彼の教育に対する信念は、後に『社会に関する新見解』で「性格形成論」としてまとめられる。

また共同の分野についての諸施策は、主に工場労働者における生活の質の向上を目指すものであった。具体的には、工場内の福利厚生施設の設置、日用品の共同購入、厨房と食堂の共同化などが実施され、これらの諸施策は後に協同組合運動の源流のひとつともされた。

1815年にスピーチした『工場制度の影響にかんする諸考察』が契機となり、その後1817年に提出した「労働貧民救済委員会への報告」で、オウエンは初めて共同社会に関する構想を発表した。同報告書において、オウエンは急速に進む工業化の進展が国民の性格形成に悪い影響を及ぼすようになっていると主張。「機械使用による人間労働の意気低下」の打開策として、産業資本家社会ではなく、共同社会による「一致と相互協同の農・工業村」を創設すべしと主張した。ここで彼が主張したのは、産業資本家は私有財産を捨て、工場運営から得られる利益を配分すべきという、その後の社会主義にも繋がる提案であった。

この思想が、後にオウエンが、「ユートピア社会主義者」と呼ばれ、また同時に「協同組合の父」と呼ばれる流れに繋がっていくのである。

2-2. 「社会制度論」で語られた共同社会の理想型

オウエンが目指した共同社会の姿は、一体どのようなものであったか。その骨格は、彼が1826年から27年にかけて、『ニュー・ハーモニー・ガゼット』で11回にわたり執筆した「社会制度論」で語られている。彼の主張は以下のようなものであった。

最初にオウエンが「社会制度論」で言及するのは「人間の不完全性」に関してである。

現行の社会制度は、「人間は自由な主体であり、それゆえ責任が課せられる主体である」²¹という認識下で構築されている。それ故に、人間は「個別化し、利己心を生み出し、そこから私的所有制度が生み出され、不幸や貧困や墮落」²²が生み出された。そこからさまざまな宗教が生まれ、「宗教的見解ゆえのあらゆる分裂、迫害、虐殺、戦争、そして火刑が生じたのである。」²³という人間間の相互不信、不和が生まれた。

社会制度は、このような不完全な人間の不完全な認識により形成されたものであり、それを改善する唯一の方策は「教育」にあるとオウエンは説く。

²¹ ロバート・オウエン「社会制度論」『世界の名著』（中央公論社） p.226

²² 前掲書 p.228

²³ 前掲書 p.227

人間は教育によって「最も親切な気質、最も良い習慣と態度、最も正しい言葉および高度な知的学識」²⁴を身につけることは比較的容易に達成できるというオウエンの信念が、「世界は教育によって統治されるであろう」²⁵という確信に繋がっていく。

オウエンがこのような信念を持つように至った背景には、先に述べたニュー・ラナアック工場における教育実践があった。そして、「人間が自分の性質の許すかぎり享受できる幸福のすべてを永久に所有できる方法は、各人の利益のためにすべての人が結合し協力することである」²⁶として、それを実現するために、「人々は小さな共同社会あるいは大きな家族に集結」することが必要であると語る。

では、実際に構想された共同体の形はどのようなものであったか。

2 - 3 . 共同体の形と運営形態

共同体の規模は、大きすぎても小さすぎても問題が生じるとし、500人から2000人以下が適切とされたが、これはおそらくニュー・ラナアック工場での経験に基づくものだろう。共同体の形状は、大きな正方形もしくは平行四辺形で、中心に公共建造物（調理場・食堂・図書館・委員会室・学校・講義室）が置かれ、その周辺に居住用家屋が配置される。建造物の外周に成員に十分な量の食品を供給するための土地・菜園を配置され、その近距離に作業場、製造工場、洗濯と乾燥用の家屋、穀

²⁴ 前掲書 p.232

²⁵ 前掲書 p.232

²⁶ 前掲書 p.236

物倉庫、貯蔵室などの施設が配置される。このあたりの配置計画に関してはモアのユートピアの影響も考えられる。

この地において、人々は教育を受け、生産労働を担う。ここで目指されている生活環境は、シンプルであり、かつ生活を送る上では過不足のない状態である。豪奢や華美的な要素は注意深く取り除かれる。居住者の生活が満たされるだけの最適生産と、最良の衣、食、住、娯楽が志向される。

近代科学が持つすべての便宜は、日常的な仕事を健康で快適なものにするために用いられる。住民は、家屋、食料、衣料、教育、仕事、診療などについて平等にその利益を享受する。能力格差は、利他心に基づき平等化される。

こうした、ある種理想的とも言える共同社会を維持するには、真の慈愛を備えた人間による運営が必須である。そのため、ここで育てられる子どもたちは「一家族のように共同生活を送り、同じ食卓で食事をし、同じ衣服を着け、同じ娯楽を楽しみ、同じ教育を受け」、その結果、反社会的思想は一切持たず、本能的に「汝の隣人を愛す」人間により構成される。

共同社会の運営に関しては、以下のような事項が「共同社会の憲法、法および規定」として語られている。

共同体の運営については、最終的には、一定年齢の全成員（例えば 35 歳～45 歳、もしくは 40 歳～50 歳）の人たちから成る委員会が指導するとされるが、それまでの間は、選挙で選ばれた 12 名の委員が、幹事、財政担当、その他の役割を担い、執行内容はすべて公開される。

各人が担う業務は、農業、製造工業、商業、家政、保険、治安などの部門に分かれ、部門は毎週、業務報告を委員会に行う。各部門は、新たな科学的改良を適切に取り入れつつ、全成員が生活を送るのに十分な生産量を担う。余剰利益については、減価償却に充てられ、その後は将来の拡張資金に充てられる。

共同生活の青年は、18歳に達したら、（共同体の）成員となることも可能である。その一方、一般社会に出て行くことも可能である。結婚したい当事者たちは、証人および委員会の承認を経て許可される。共同体での教育を経て、婚姻した二人は、一般社会のような性格の不一致、条件の不平等などに基づく離婚などは、殆ど想定外とされる。宗教的自由、精神的自由も保証され、適当な礼拝場所も用意される。老人や生まれながら障がいを持つ個人は共同社会により扶養され、孤児も特別の保護を得る。共同社会から脱退することを希望するいかなる人も、いかなるときにそうすることも完全に自由である。

「社会制度論」で語られるこの共同体のあり方は、現在においては、いささか滑稽のようにも感じられる。しかし、オウエンは大真面目である。彼は、この共同体の実現に向けて奮闘するのである。

労働の余剰を資本家が搾取するのではなく、居住者により平等に分配される。居住者間のさまざまな格差は、利他心と博愛の精神により平準化される。こうした「平等主義」を成立させる精神的支柱は、宗教心に基づくものではなく、教育制度によって可能となる、というのがオウエンの主張であった。

2 - 4 .ニュー・ハーモニーの誕生

その後 1820 年代に、オウエンはアメリカ合衆国で「ニュー・ハーモニー」の創設、建設に奮闘する。この「ニュー・ハーモニー」が建設された地は、もともとドイツ人の宗教家ジョージ・ラップが所有していた場所であった。ドイツにおける教会の形式主義に不満を抱いた彼が、宗教上の自由を求めてアメリカ合衆国に移住、1803 年にピッツバークの近くに自給自足の村を形成。その後、1814 年にインディアナ州に 3 万エーカーの土地を買い入れ、「ハーモニー村」を築き上げていた。しかし、その後周辺の開発が進み、人々の信仰が鈍ることを懸念したラップは、この土地の売却を決意。それをオウエンが購入したものだ。

1825 年 4 月、オウエンは「ハーモニー」の購入契約書に署名、土地および設備一切を 3 万ポンドで購入した。オウエンがアメリカで共同体を設立したように考えた理由としては、米国は新開地で自由の空気に満ちていたこと、アメリカ合衆国の南部地方にはいくつかの新しい理想の村がすでに建設されていたことなどが理由として挙げられる。²⁷

そして、「ニュー・ハーモニー平等村 (New Harmony Community of Equality)」が創設された。買収費は最終的には総額 12 万 5 千ドルにのぼった。この買収費に充てるため、オウエンはニュー・ラナアックの自分の持ち分を売却した。元貿易商人でフィラデルフィア自然科学アカデミーのパトロンで地質学者、ウィリアム・マクルールがオウエンの思想に共鳴し、私財を投じた。

1825 年、2 月 25 日と 3 月 7 日の 2 回、オウエンはアメリカ議会で大統領、国会議員らを前に「新社会制度」について講演、ニュー・ハーモニーへの来村を勧誘した。同年、世界に生産過剰を原因とする近代恐慌

²⁷ 前掲書 pp-124

が発生し、翌年にかけて欧州からの移住者が増加、労働者 900 人をはじめとして移住希望者が集まった。1826 年 1 月 24 日には、欧米の優秀な自然科学者ら 27 名の一行が来村した結果、ニューハーモニーはアメリカにおける文化の中心地となった。

1826 年 2 月 5 日には、「ニュー・ハーモニー完全平等共同体憲法」が制定されたものの、実際の共同体運営については、オウエンの当初の目論見は大きく外れ、混乱を極めた。意見の対立から、26 年 5 月には分村が進行、それにつれてオウエンとマクルールの対立が深刻化していった。共同体の存続は 2 年あまりで限界に達し、オウエンは巨額損失を覚悟で経営権を放棄する決断を下した。

失敗の原因としては、大きく以下の点が指摘されている。①入植を希望する住民選別が不十分：知識人、文化人、労働者に対して、農業の経験者や道具メンテナンスのスキルを持つ職人がおらず、即戦力人材が揃わなかったこと。②成員間の宗教的、社会的、人種的偏見が根強く存在し、対立構造が生じたこと、③怠慢・勤勉に対する賞罰が欠落しており、労働意欲の低下が深刻化したこと、④舞踊や音楽などの文化活動に耽って労働を忌避したこと、⑤平等の実現を掲げたため、委員による意思決定の過程が不明瞭であったこと。

オウエンの高邁な理想とは裏腹に、共有資産の私物化も進行し、最終的にオウエンの夢は潰えてしまう。²⁸オウエンは、1828 年 6 月にニュー・ハーモニーに別れを告げ、英国に帰国するのである。

²⁸ 宮瀬陸夫 (1962)『ロバート・オウエン：人と思想』（誠信書房）

2-5. ニュー・ハーモニー後の共同体構想

オウエンのニュー・ハーモニー計画は失敗に帰したものの、オウエンの掲げた平等共同体のビジョンは、当時の多くの人々の心を揺り動かし、その結果、ニュー・ハーモニー以外でも共同生活体設立の動きが各地で起こった。

ニュー・ハーモニーが米国で設立される 1825 年以前にも、英国では共同体設立に向けた機運が盛り上がった。1822 年 6 月に結成された「英国内外博愛協会 (British and Foreign Philanthropic Society) は、オウエンの主張を実践するために結成されたものである。

費用不足により実現はしなかったものの、オウエンを崇拜する共鳴者であったジー・エー・ハミルトン (G.A.Hamilton) は、ニュー・ラナークから数マイル離れたマザーウェルにある彼の土地に共同体を設立しようと熱心に活動した。(しかし、資金が集まらず最終的には挫折) 同じく、英国では 1825 年、グラスゴウの東方オービストンに共同体が建設された。この村の創設者は、エジンバラ生まれのアブラム・コム、オウエンの熱心な信奉者であった。ニュー・ハーモニーと同様のコンセプトで村の運営が行われたものの、1827 年コムの死去に伴いオービストン共同体は財政難に陥り解散した。

オウエン自身も、ニュー・ハーモニーが失敗に帰した後、再びアメリカに赴き、メキシコで新たな共同体設立へチャレンジする。メキシコ大統領に交渉し、国境付近での土地提供協力を取り付けたものの、メキシコ議会による拒絶により、再びオウエンの目論見は潰えてしまう。

2-6. 平等という思想

オウエンが目指そうとしたユートピア・コミュニティの特徴を再度整理してみる。それらは、①農業、もしくは工業を中心とする自給自足経済への志向、②私有制度の放棄、共有制度への志向、③全員参加型によるコミュニティ運営として集約できる。

これらの思想の背景に見えてくるのは、すべからく平等であれという概念である。平等という概念は、歴史的に紐解けば、古代ローマ、ギリシア思想にもその萌芽を見出すことができる。しかし、この時代特に注目されるに至ったのは、フランスの市民革命を経て、封建的階級社会から市民社会へ時代的転換が図られる中で、個人の自由と平等のあり方がほのかながら垣間見えてきたからであろう。

ルソーは、『社会不平等起源論』『社会契約論』において、国家成立の要因として、国家は個々人が自由と平等を最大限に確保するための契約が必要であると語ったが、オウエンは、いわば国家ではなく、コミュニティ＝共同体を一つの組織単位として、ルソーの語る平等国家を実現しようとしたと言えるだろう。

2-7. ルソー『社会契約論』

ニュー・ハーモニーにおいてオウエンが目指した生活のあり方の基調は、“平等”にあった。この平等という概念をオウエンは、一体何処から得たのであろうか。

この時代において平等というキーワードでまず想起されるのは、ルソーの『社会契約論』である。1762年に出版された『社会契約論』は、

国家統治に関し、それまでの王権による専制統治を否定し、その後の人民による直接民主制、共和制成立の理論的支柱となった。ルソー、モンテスキューをはじめとする啓蒙思想の動きは、新たな近代国家体制の成立の契機となった「フランス革命」の勃発にも少なからず影響を及ぼした。

『社会契約論』においてルソーは、市民を主権とする国家統治に関する理論を体系化した。理論の主骨格には「一般意志」という概念が据えられ、それにより実現されるべき究極目的は、すべての人々の自由と平等であるとした。

専制政治における王権と人民の関係は、暴力としての権力を基礎とする人民への従属の強制による関係に他ならない。しかし、いかなる人間も権力を保持し続けることは出来ない。国家の為政者と人民の関係は、あくまで「約束」に基づくものでなくてはならないとルソーは語る。しかし、その「約束」は、個人の意思としての「特殊意志」ではなく、個人意志の総体としての「一般意志」によるものでなくてはならない。

「一般意志」の行使が、王権による国家統治ではなく、市民による国家統治の根幹となる。この思想に基づき、政府、代議制、投票制度などの政府運営の方法論などが述べられる。

この一般意志という概念はかなり特異な概念であるが、言ってみれば、個人の主権の一部もしくはすべてを主権としての国家に贈与する見返りとして、市民は市民としての平等な権利を再配分されるとも読める。

この市民と統治の関係性は、まさにオウエンやフーリエが目指した生活共同体におけるコミュニティ参加と全体組織運営の関係性に相似して

いる。また、ルソーは平等という概念を担保するのが一般意志であり、特殊意志は差別のほうに傾くと語る。

ルソーは、家族の関係性すらも、実はこうした契約・約束（一般意志）に基づくものであると指摘する。家族は、「あらゆる社会の中でもっとも古く、またただ一つ自然なもの」ではあるが、その自然である期間は、「子どもたちが、自分たちを保存するために父を必要とする期間」に限られるものであり、それ以外の期間においても家族が結びついているように見えるのは、両者の意志、約束に基づくものであるというのである。²⁹

ルソーによるこのような思想背景を根拠として、共和制という市民による国家統治システムは生まれたわけであるが、これにより彼が理想像として掲げた自由・平等社会が訪れたかという点、それは残念ながら実現しなかった。それを阻んだのは、ブルジョワジーの存在である。

ブルジョワジーは市民革命において社会変革をもたらすための中核的な役割を果たしたものの、彼らの一部は同時に進行していた産業革命と結びつき、産業資本家として台頭していった。その結果、ブルジョワジーが貴族階級に代わる新たな支配階級となり、第二次産業の担い手であった労働者階級との対立の中から階級社会を生み出していったのである。

こうした貴族＝身分という身分階層別社会の連鎖を断ち切ろうとしてみず動きはじめたのが、オウエン、フーリエなどのユートピア社会主義者であったと言えるだろう。

²⁹ ルソー『社会契約論』岩波書店、桑原武夫、前川貞治郎訳

2-8. エンゲルスによる批判と評価

ロバート・オウエンは、サン・シモン、フリーエとともにユートピア社会主義者と呼ばれ、彼らの思想はマルクス、エンゲルスから、彼らが主張する共産主義の唯物史観からは大きく外れるもので、幻想（ユートピア）にすぎないとして、厳しく批判に晒された。エンゲルスによる批判の論点は、大きく以下の点であった。

彼らが、3人ともプロレタリアートの真の代弁者でないこと、資本主義発展の未成熟さに対応して彼らの理論も未成熟であり、そのため新しい社会の成立を歴史発展の必然的結果でなしに、頭のなかで作りに上げる必要があったこと、それゆえ彼らの未来社会の構想ははじめからユートピアになる運命にあったと指摘している³⁰。

一方でエンゲルスは、「ユートピア社会主義は、資本主義経済の発達がまだ幼弱な時代において、早くもその諸矛盾を指摘、告発し、資本主義経済の底辺にある勤労階級の視座から、それらの諸矛盾を克服するための諸方策を提出した。」³¹とも語っており、ユートピア社会主義に一定の評価を与えることも忘れてなかったのである。

³⁰ 五島茂、坂本慶一(1975)「ユートピア社会主義の思想家たち」『世界の名著続8 オウエン サン・シモン フーリエ』中央公論社

³¹ pp79

第3章 日本におけるコミユナルリビングの系譜

第1章、第2章において、われわれは主に欧米を中心としたコミユナルリビングの歴史を辿ってきた。本章では日本におけるコミユナルリビングの歴史を辿ってみたい。

3-1. 日本におけるコミユナルリビングの歴史

コミユナルリビングの系譜を整理するに当たり、第2章でコミユナルリビングのタイプをユートピア型コミユナルリビング、実践型コミユナルリビングに分類し、さらに実践型を宗教型、社会改良主義型、キブツ型、スピリチュアル型、コハウジング型、リタイアメント型タイプに類型化した。

日本にも古事記に象徴されるように固有の神話やさまざまな宗教が存在している。日本におけるユートピア型コミユナルリビングも最初は、こうしたところから生まれた。安永壽述は、『日本のユートピア思想』（1971）で日本的ユートピア思想の源泉として、出雲系神話に現れる常世や、日本書紀と続日本書紀所収の浦島伝説、仏教に見られる弥勒信仰などと指摘するが、これはユートピア型コミユナルリビングの範疇に属するものと言える³²。

実践型コミユナルの源泉としては、安藤昌益、権堂成卿、谷川雁などに代表される江戸時代から戦前に至る農本民主主義思想の流れに見出すことができる³³。安藤昌益（1703-1762）は、江戸時代中期の医師、思想家・哲学者である。著書『自然真営道』において、身分・差別階級を

³² 安永壽延（1971）日本のユートピア思想 コミュニオンへの志向 法政大学出版局

³³ 奥井智之（1990）60冊の書物による現代社会論 五つの思想の系譜 中公新書 159

日否定して、全ての者が労働（直耕＝農業）に携わるべきという徹底とした平等思想を唱えた。また権堂成卿(1968-1937)は資本主義を批判し、農村を基盤とした共済共存共同体としての「社稷国家」の実現を唱えた。

欧米で宗教型コミユナルリビングが誕生した契機となったのは、宗教間のセクト対立と同時期に新大陸の発見にあった。社会改良主義型コミユナルリビングは、市民革命と第一次産業革命を契機とする資本者階級と労働者階級の対立解消を主目的に生まれた。

同時期の日本は鎖国状態にあり、こうした欧米の状況とはほぼ無関係であった。日本において封建社会が解かれ、諸外国のさまざまな情報が流入し、産業資本による発達が始まったのは明治維新以降のことである。国家主導による産業振興から民間資本の蓄積が次第に進み、士農工商という固定化された階層社会ではなく、市民社会内で貧富による階層格差が形成されていたのは明治末期から大正にかけてのことであり、この頃には、次第に日本においても社会主義思想、共産主義思想が次第に広がってきた。こうした時代環境を背景に、日本国内においても徐々にコミユナルリビングが生まれる機運が整ってきた。

明治後期から昭和初期にかけて、日本各地でもいくつかのコミユナルリビングが生まれた。これらのいくつかは（「新しき村」など）、欧米の社会改良主義思想の流れに一定の影響を受けたものであったが、それ以外にも、一燈園や紫陽花邑など、独自の信仰を元にしたコミユナルリビングも誕生した。その意味で、日本におけるこの時期は、宗教型コミユナルリビングと社会改良型コミユナルリビングが同時発生した時期であったとも言えるだろう。

3-1-1.武者小路実篤「新しき村」

日本における最初のコミューナルリビングは、武者小路実篤が、「人間らしく生きる」「自己をいかす」ことができる社会を求め、大正7（1918）年に宮崎県児湯郡木城町石河内（現在）に創設した「新しき村」である。

武者小路が「新しき村」の創設に思い至った理由については下記のように説明されている。彼自身が、出自である華族の食客的生活に大きな疑問を抱いていたこと、トルストイ作品から影響を受け、作中の簡素な生活に大きく心を動かされていたこと、華族でありながら農耕生活を経験した叔父からの影響、前年に起きたロシア革命などである。

武者小路がどの程度トルストイから直接的影響を受けたのか、詳細は不明であるが、たしかに同時期の19世紀末から20世紀初頭にかけて、トルストイ運動と呼ばれるキリスト教平和主義に繋がる禁欲的でシンプルな生活を志向する集団がロシア、欧州、アメリカの各地において生まれている。ウィキペディアによると、ロシア国内でもウラジミール・チャートコフにより農業コロニー運動が主導され、その後、スモンレク、トヴェリ、サマラ、ペルミ、キエフの各州に農業コミュニティが1917年のロシア革命直後に設立された。この動きは、ロシア国内に留まらず、欧米やアメリカにまで広がっていった³⁴。おそらく武者小路はこのような活動を伝聞し、自らもそうしたコロニー設立に動いたのであろう。

³⁴ ウィキペディア TOLSTOYAN MOVEMENT（トルストイ運動）の項参照

（https://en.wikipedia.org/wiki/Tolstoyan_movement）

社会階級による格差に対する反対意思表示という視点では、オウエンやフーリエなどの社会改良主義思想と共通する部分がある。共同体設立の進め方についても雑誌連載を通じて賛同者を集めるなどの方法論は同じく社会改良主義コミユナル・リビングで、「イカリア (ICARIA)」や「KAWAH CO-OPERATIVE COMMONWEALTH」「RUSKIN COOPERATIVE ASSOCIATION」「ホーム・コロニー (HOME COLONY)」などが冊子や新聞、雑誌を通じて参加者を募ったのと同様の手法である。新聞や雑誌という大衆メディアの勃興が、こうした動きを後押ししたのであろう。

大正7(1918)年、「大阪毎日新聞」夕刊の連載小説欄に執筆した『新しき村の生活』(全7回)、同年雑誌『白樺』5~6号の「新しい生活に入る道」「同 二」が、武者小路による「新しき村」のマニフェストとなった。この記事はともに大きな反響を呼び、賛否入り乱れる激しい論評を巻き起こした。その中で、実篤は「新しき村」の実現に向け、各地で演説会を開催、運動に対する賛同者を得ると同時に候補地の選定を行った。

最終的な候補地となったのは、宮崎県の山間部にある中世の山城跡であった。宮崎県中部を流れ、最終的には日向灘に河口を持つ小丸川が大きく蛇行する土地である。川向こうからその瘤のような形状のような地を眺めると、世間から隔絶された理想郷(ユートピア)としては最適な地のようにも見えてくる³⁵。実際、東京から遠く離れたこの地を選定するに当たって、実篤は「第一に日向という国が気に入り、高千穂という日本創生の地というイメージが魅力的だった。」と機関誌に書いてい

³⁵ 2019年5月30日、筆者による現地視察にもとづく。

る。³⁶日本書紀に描かれた場所を選んだという点では、「新しき村」は、ユートピア型コミューナル・リビング的性格も帯びていたと言えるだろう。

地元の篤農家・津江市作氏の協力を得て 6.5 ヘクタールの土地購入、農業を中心とする共同生活を大人 20 人、子供 2 人の合計 20 人でスタートさせたのが 1919 年のことであった。

「新しき村」は、その後評判を呼び、最大では約 60 名の人々が共同生活を営んだ。しかし、当初目指した農業経営による自立を達成することは適わず、常に実篤の原稿料収入による資金的援助が求められた。そのため、設立当初は「新しい村」で同居生活を営んでいた実篤だが、自らは東京に戻り、資金的バックアップに専念することになる。

「新しき村」は、その後「東の村」（埼玉県）への移転を経ながらも、宮崎の「新しき村」も 1 世紀の長きにわたりその活動を続けて現在に至っている。

また、1939（昭和 14）年から開墾が始まった「東の村」（埼玉県入間郡茂呂山町・昭和 29 年には名称を「新しき村」に改名）は、戦時期を経て、入居者が次第に増加し、稲作、畑、養鶏、乳牛の飼育、果樹と次第に栽培品目を拡大しつつ、経済基盤の確立を目指した。1958（昭和 33）年には、ようやく当初からの悲願であった「村の自活」を達成することが出来た。まさに宮崎でのスタートから 40 年がかかったことになる。その間の赤字負担は実篤による執筆活動や村外会員の支援に支えられ続けたのである。

³⁶ 森谷とみ（1980）回想・新しき村 大きなタネの会

1976年には実篤は90歳で死去するが、その後も活動は現在まで続いている。1980年には60名を超えた村内生活者も、その後は減少を続け、2020年時点での村内生活者は13名。一時は達成できた自給生活も、主力事業の養鶏事業の困難に加え高齢化が追い打ちをかけ厳しい状況が続いている。近年では村内敷地に太陽光パネルを設置し発電事業にチャレンジするなど自立経済へ向けた努力が続けられている。

3-1-2.有島武郎「樺太共生農園」

同時期、同じく白樺派に属する文学者の有島武郎も農業コミューナル・リビングを構想していた。これは明治政府の官僚であり後に実業家としても成功した父武から相続した450haの農場土地を小作人に解放しようとするものであった。

彼がそのように考えた理由は、当時、彼が創作不振に陥っていた理由が、親ゆずりの財産にあると考え、それらを精算することで自らの創作を再生しようと考えたためである。

1922年、小作人に対し、彼らが相互扶助的な自治組織を結成し、農地を共有することを前提に無償解放を宣言。翌年彼は死去したが、1924年には北海道狩太村（現ニセコ村）に「樺太共生農園」が設立された。小作人は出資金を出して団員となり、合議制により、土地共有し、資材・機械の共同購入、共同利用、市場への共同・直接販売などを行った。その後、さまざまな苦難を乗り越えたが、戦後1949年の第2次農地解放により解散を命じられてしまう。

3-1-3.一燈園（京都）

この他、明治後期から昭和初期にかけて生まれた日本型コミユナルリビングとしては、1913年（大正11）に設立された一燈園（京都）、1940年（昭和15）設立の心境部落（奈良）、紫陽花邑（奈良）などがある。

一燈園は、創始者西田天香による「おひかり（神・仏・大自然）」という独自信仰に基づくコミユナルリビングである。大正時代に発足したこの組織は、一般、企業からの多くの賛同者を得て現在も活動を活発に行っている。

1872年滋賀県に生まれた天香は、北海道石狩の原野開拓、断食苦行、路頭行願などを経た後、30代半ばに独自の信仰思想にたどり着く。それは、「人間の生命は自然からの授かりものであり、生きようとしなくても生かされているものである。自然にかなった生活をすれば、人は何物をも所有しないでも、働きを金に換えないでも、許されて生かされる」³⁷というものであり、こうした信条に基づき、つねに懺悔の心を持ち、無所有奉仕の生活を行う場が一燈園なのである。

一燈園の活動内容を示す最も特徴的なものが六万行願である。修行の一環として、他人の家の便所掃除をさせていただく事を示し、自己の誇りやプライドを捨て、他人の為に尽くすことを重なることで、己の心を清く改めるのが目的である。

共同生活の場は、1930年から京都市東山区山科の地に営まれている。1955年には一燈学園を開設。現在は小学校から高校までの一貫教育を行う学校法人燈影学園として活動を行っている。「無一物無所有」

³⁷ 水津彦雄 1971 日本のユートピア 太平出版社 ,一燈園サイト (<https://www.ittoen.or.jp/>)

という一燈園生活の基本を忘れずというあり方を宣光社と呼び、こうした応用生活の可能性を研究、開拓するところとして一般財団法人光泉林が設けられている。光泉林の活動としては、一燈園生活者のための平和を祈る施設の提供、托鉢先の提供、生活の記録・研究、教育と福祉の貢献などを行っている。

3-1-4.心境同人（奈良）

心境同人は、昭和15年にその活動を開始し、その後90年を経た現在も社会福祉法人心境荘苑として活動を行っている組織である。創始者は尾崎増太郎。

心境同人の発足経緯はいささかユニークである。元々ここは特定の理念や信仰に基づいて設立されたものではなく、「村八分」という今では耳にすることのない村落共同体での出来事がきっかけとして生まれたものである。心境同人が生まれた所は奈良県宇陀という土地柄、地元住民の多くは天理教信者が殆どであり、尾崎増太郎自身も熱心な信者であったが、自分の娘が難病となったことをきっかけに、信仰に疑義を抱くようになる。その結果、同じく疑義を唱えた数人の仲間とともに彼は村八分の憂き目にあう。それをきっかけで始まったのが、仲間達との共同体生活であった。農業生活を維持するために共同で籾摺機、脱穀機を購入し、炭焼きも共同作業化し、炊事、食事、風呂なども共同化、さらには家畜も共同管理となった。戦後は、農業に加えて畳床製造を共同事業の柱に据えることで生活が安定した。

1967年からは、奈良県知事からの依頼もあり、新たに知的障害者入所更生施設を開所。知的障害者の就労支援施設としての性格を強めていき、積極的に障がい者就労を採用し、共同生活雇用の道を深めていっ

た、現在は名称を心境荘苑と変え、障がい者支援施設、グループホーム、就労支援センター、相談支援センター、地域密着型特別養護老人ホームなどの障がい者に関する一大支援センターとなっている。³⁸

3-1-5.幸福山岸会（三重）

新しき村以降、日本においてもいくつかのコミユナル・リビングが生まれたが、1953年に京都で誕生し、それ以降、現在で活動続ける日本最大・最多数の活動拠点を持つコミユナル・リビングが幸福山岸会（以下、ヤマギシ会）である。

同会の創始者は山岸巳代蔵である。活動当初は、彼が独自に開発した養鶏飼育法を普及するための組織としてスタートしたが、その後、彼の唱える理念、すなわち人と自然、人と人が一体のものとして生活すべきという「全人類幸福社会」思想に共鳴する人々が次第に集う組織となり、会の行動原理である「無所有、共用、共活」を実践する場として「社会実顕地」が各地に広がった。

1950年代に生まれたヤマギシ会は、1960年代末から70年代にかけては新左翼活動家たちの挫折と衰退の中で、彼らのオルタナティブ志向、すなわち反公害、農業、福祉への関心との共鳴もあり参加人員の拡大を果たした。加えて1980年代には子ども楽園村の設立で教育問題に悩む親たちの共感を得ることに成功し、さらなる拡大を果たした。ピークは「実顕地」は95年に日本全国に39カ所。98年にはメンバー数は

³⁸ 水津彦雄 1971 日本のユートピア 太平出版社 ,心境荘苑サイト

(<http://www.shinkyousouen.or.jp/outline/>)

4400人とピークを迎えたが、その後さまざまな社会批判を受けたこともあり、その後、実顕地数とメンバー数は減少している。

同会は2020年5月現在、実践活動の場としてのヤマギシズム社会実顕地（通称「ヤマギシの村」）を国内26カ所（海外7カ所）に構え、国内では約1500人の人々がそれぞれの地で共同生活を行っている。実顕地は、当初活動の地であった三重県、和歌山県を中心に、北海道から関東、北陸、中四国まで存在している。

3-1-6.ヤマギシ会の活動内容

ヤマギシ会の活動内容を見ていくことにする。³⁹

ヤマギシ会の活動には、山岸巳代蔵の思想が色濃く反映されている。実践のベースにあるのは、「無所有、共用、共活」という基本姿勢である。ヤマギシに入村を希望するものは全財産を提出し、無所有の姿となったうえで社会実顕地に入村する。

共同体内での労働活動は、それぞれに役割が与えられ分業化される。例えば豊里実顕地における主な生産活動としては、畜舎（乳牛、肉牛、養豚）及び加工場（ミートセンター、農産加工場、精乳所、冷凍庫）などでの作業がある。これに加え、家事労働についても社会化がなされており、食堂、洗濯、衣類保管業務などが割り当てられる。こうした労働に対する対価である賃金は基本的に支払われない。（1999年からはメンバー一人に対して小遣い月額1万円を給付）

一方、入村者には住居、食事、洗濯、医療、衣服など日常生活に必要なと考えられるものについては全て無料で提供される。衣服は共有であり、車も共同所有である。洋服など何かしらの品を自己所有するという

³⁹ 村岡到（2013）『ユートピアの模索 ヤマギシ会の到達点』（ロゴス）

ことは、自己顕示欲にも繋がるものである。そのような物の所有は否定されており、衣類は、共同で所有している衣服類の中から適宜選んで身にまとうのである。

子供たちは、乳幼児期は両親と共に生活するが、5歳になると親元を離れ、合宿生活を送る。

ヤマギスズム学園幼年部から初等部、中等部における共同生活を通じて、『実物』に触れる環境の重要性、農業の重要性、仲間集団の大切さなどを重視した共同生活が営まれる。

一方、高齢者は、老いてますます蘇るの意味を込め「老蘇」と呼ばれる。老蘇にも、それぞれの能力（できること）に応じて、例えば、ロビーの新聞入れ替え、洗濯たたみ、花の水やりなどの役割が提供される。

こうしたヤマギシズム思想に基づいた共同生活のあり方を見ると、かつてロバート・オウエンが実現しようとしていたニュー・ハーモニーの共同生活のあり方が十全に実現されているようにも見える。オウエンは、私有財産を放棄し、居住者の生活が満たされるだけの最適生産を実現し、家屋、食料、衣料、教育、仕事、診療などの平等な利益享受、能力格差の平等化を共同生活の理想として目指したものの、残念ながら実現することなく終わった。しかし、ヤマギシでは、それが実現しているかのようにも思える。実現維持を可能としたのは、初期においては高効率生産を実現した山岸会式養鶏法であり、1980年以降は無農薬、有機栽培などの産直ブームを売りとして、消費者の高い支持を得る供給システムの構築を実現したことにある。

しかし一方で、ヤマギシ会は、過去に何度も活動内容が社会問題化した事実を指摘しておかなくてはならない。繰り返し何度も起きているの

は、元会員による財産没収と思想教育を巡る訴えである。社会実蹟地に入村する前提条件として、7泊8日にわたる「特講」（ヤマギシズム特別講習研鑽会）への参加、次に2週間の合宿研修「ヤマギシズム研鑽学校」への参加が求められる。加えて入村（参画）するに際しては、全財産をヤマギシ会に委任する「誓約書」への同意署名が求められる。「無所有、共用、共活」を基本思想とする故の対応ではあるが、一旦は了解し入村したものの、やはり活動内容に疑義を生じ、脱会しようとする際に、寄託した財産の返還を求めても応じないことから、元村民による訴訟が90年代以降次々と起こされた。訴えの主訴は、退会に伴う寄託財産の返還請求が多く、近年の多くの判決は訴えを完全支持するものの全額返還ではなく、共同生活期間の一定経費を差し引いた上での返還を命じているケースが多いようである。⁴⁰また、子供たちの教育に関しても、体罰やパワハラ的な言動が一時間問題となった。

3-2.1 970年以降の日本のコミユナルリビング

このように日本でも欧米とはいささか異なる側面を持ちつつ、いくつかのコミユナルリビングが誕生した。1970年前後には米国のヒッピーカルチャー・ムーブメントの影響も受け、日本においてもスピリチュアル型のコミユナルリビングがいくつか誕生した。ウィキペディアによると、滋賀県高島郡朽木村や鹿児島県諏訪之瀬島などにはかつてヒッピ

⁴⁰ 例えば、2005年2月17日元会員4名が起こした財産返還訴訟の津地方裁判所における判決は、「返還請求をしないとする契約は、事実上脱退の自由を制限するもの」と指摘する一方で、「脱退するまでの期間、生活費はすべてヤマギシ会が負担し、原告も自己の財産がヤマギシ会や他の構成員のために使用されることを承知の上で全財産を預けており、全財産の返還を請求しうると解するのは相当ではない」として、うち2人の請求の一部の4100万円の支払いを命じている。（2005年2月17日 毎日新聞 中部夕刊）

ーコミュニケーションが存在していたようである。諏訪之瀬島のコミュニケーション住民はその後、東亜燃料工業の石油備蓄計画の反対運動に加わるために鹿児島県大島郡宇検村に移住し、この地でコミュニケーション「無我利道場」

(1973~89)を創設した。また福島県双葉郡川内村には、1973年からこの地で反原発活動を行う住民たちによるエコビレッジ「猿原人村」が現存しているようだ。

日本でもいくつかのスピリチュアル型のコミューナルリビングの動きがあったようだが、いずれも大きなムーブメントとなることは無く一過性の動きとなった。これらは米国の精神世界コミューナルリビングとは異なり、当時活発であった新左翼的活動と結びついていったのが日本の特徴であり、それが活動を短命にさせたとも言える。

またこの時期、一時期ではあるが共同体コミュニティに対する学術的関心が高まった。思想の科学研究会メンバーを中心に「ユートピアの会」が組織され、1960年から70年までさまざまな視点から共同体のあり方をテーマに議論がなされた。活動結果は『日本ユートピア学事始』(1973)としてまとめられた。鶴見俊輔や水津彦雄はヤマギシ会を理解するための一週間の特別講義「特講」に参加し、水津はそれ以外の共同体も長年にわたり調査を重ね『日本のユートピア』(1971)を上梓した。北海道学芸大学教授であった草刈善造教授はイスラエル「キブツ」を長く研究し、『キブツの挑戦』(イスラエル・リング著・1974)を翻訳している。日本のコミューナルリビング相互の交流、「キブツ」との接近もこの時期試みられている。1962年に設立された「日本協同体協会」が窓口となり、キブツ研修生200名が70年までに200名余りのキブツ研修生を受け入れている。また1970

年には「日本の協同体・話し合ってみる会」が開催され、ヤマギシ会、一燈園、大倭紫陽花邑などが参加した。

一時期は、日本国内でもこのようにキブツやヤマギシ会を始めとする日本のコミユナルリビングに対する関心が高まった。しかし、その後の経緯を見る限り、それは長続きしなかった。その理由としては、左翼的思想活動に対する国家の強い警戒と活動制限、エコロジー運動の停滞など、いくつか考えられるが、70年代以降の高度経済成長の波の中で、オルタナティブな暮らしのあり方を求めようとする思想は埋没してしまったのではないだろうか。しかし、本論では多くは取り上げないが、近年従来のコミユナルリビングほどの厳しい規律は求めず、よりゆるやかな人間関係のなかでの暮らし方を取り戻したいと考えている人々が増えているように感じられる。次に1970年以降誕生したそうしたコミユナルリビングをいくつか取り上げる。

3-2-1. 共働学舎

共働学舎は、2020年現在、信州や北海道など全国5カ所に拠点を持つコミユナルリビングである。共同生活を営むのは主に自閉症、ひきこもり、障害者などの心や身体に不自由を抱えた人々であるが、同施設は、福祉施設認定はあえて受けず独立した非特定営利活動法人として、各種生産活動を通じて自活の道を探っている。

共働学舎の創立は1974年。創設者は宮嶋眞一郎。彼は、自由学園（東京）で長く教鞭を執っていたが徐々に視力を失う病となり50歳を機に教職員を退職。郷里の長野に戻り共働学舎を創設した。彼が勤めていた自由学園は1921年に設立されたプロテスタント系キリスト教精神に基づいたユニークな教育を行う学校として有名である。机上の学び

だけでなく、生活の全てが教育に繋がる”生活即教育”の精神が基本の教育方針であり、授業のひとつとして、学生たちの手で野菜を栽培し、家畜を飼い、得られた作物を調理し、共に食卓を囲み、最後は片付けるといった生産過程まで入り込んだ教育プログラムなどを実践している。宮嶋が共働学舎で採用したのも同様の生活様式であった。

リーフレット『共働学舎の構想』（共働学舎発行）において、眞一郎は学舎を創設した理由について以下のように語っている。⁴¹

彼が最初に挙げているのが、競争社会への疑念である。競争が進むことで、勝者が弱者を差別し、勝てぬ人に対する不公平感を生み出してしまふ。そうした競争的価値観ではなく、本来人間ひとりひとりに与えられている固有の価値を重視し、皆が協力し合うことで個人ではなしえない価値のある社会（協力社会）をつくるべきであると彼は説く。

勤労生活は重視すべきだが、ただやみくもに生産性を重視するのではなく、「自らの力で作り出すことの喜びを味わうことが、生活の大切な要素」であり、「その苦労が人間性を高く深く成長させる」と彼は語る。

そして、福祉という仕事が先を急ぐ物質文明の落ち穂拾いの役割に終わっている限り、科学技術の発達に比例する心身の障害の増加を止めることは出来ないとし、「障がい者を安全管理することが福祉であるとは思えません」と現行の福祉制度を批判する。

そして、「競争社会よりも愛による協力社会の方が、個人としても社会としても豊かになり得ることを信じます」「共働学舎はこれらの願いと祈りをもって始められた、独立自活を目指す教育社会、福祉集団」と宣言している。

⁴¹ NPO 法人共働学舎（2015）共働学舎の構想 第 14 版

この思想の底流に流れているのは、言うまでもなく自由学園と同様のキリスト教精神である。

共働学舎の名称も、ローマ人への手紙 8 章 28 節、すなわち「神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事益となるようにして下さることを、私たちは知っている。」から採られている。

キリスト教社会においては、平等と博愛の精神に基づき、障がい者や高齢者などが差別を受けることなく、ともに一般社会の中でそれぞれの出来ることに応じる働き方を選びつつ暮らせる社会を目指すという考え方がある。その代表例がドイツ連邦ノルトライン＝ヴェストファーレン州ビーレフェルト近郊にあるてんかん、障がい者、高齢者、社会活動が困難な若者、ホームレスの人々が生活するベテル財団である。ベテルは 1867 年にてんかんの子供や青年のための施設として設立され、以来 150 年余にわたり、多様な人々が共に生活し、学び、働ける環境の形成に努力している。現在では、約 2 万人の従業員がこうした人々を助け、サポートしている。共働学舎は規模としては圧倒的にベテルが勝るが、理念としては同様の思想を抱きつつ活動していると言ってもいいだろう。

表 5 共働学舎の一覧

施設名	住所	開設年	人数	主な生産物
立屋共働学舎	長野県北安曇郡小谷村立屋	1974年	約40名	有機無農薬米、野菜、味噌、パン、菓子製造、織りや染め、木工など
真木共働学舎	長野県北安曇郡小谷村真木		数人	夏期に少年少女勤労合宿、大学生教育実習、国際ワークキャンプなどで利用
寧楽共働学舎	北海道留萌郡小平町寧楽		役30人	米、野菜、豚肉、卵、ソーセージ販売
新得共働学舎	北海道上川郡新得町新得	1978年	約60人	牛、豚、
南沢共働学舎	東京都東久留米市南沢		数名	自宅からの通いで少人数がクッキーを製造

共働学舎は現在、長野県（2カ所）、北海道（2カ所）、東京の計5カ所で実践的活動を行っている。（表5参照）基本的には米、野菜、卵、豚肉、クッキー、菓子などの製造販売を行い、自労自活の道を追求している。北海道では、チーズの製造、販売なども行っている。但し、実際は全面的な自活はなかなか困難であることから、会員制度の導入により組織を精神面、資金面からサポートするという仕組みを導入している。

3-2-2.木の花ファミリー

木の花ファミリーは静岡県富士宮市にあるオルタナティブな生活を志向するコミュニティリビングである。⁴²木の花ファミリーのスタートは1994年。愛知県小牧市で内装業を営んでいた“じいじ”が独特な宗教観を持つに至り、実践の場として20名の仲間とともに静岡県富士宮市に移住し、「木の花農園」で共同生活を開始したのが始まりである。思想的にはニューエイジズムに近いもので、人工世界・自然世界（現象世界）の先にある潜象世界との天然循環を進めることによって人工世界で失われる生命エネルギーを取り戻すことができるという基本思想である。

具体的な活動内容は、自家農園での農業活動及び生産物の販売がベースとなっている。現在110品目250種類を超える野菜や穀物、米や自然卵、味噌、しょうゆを無農薬農法で生産し、食料はほぼ自給体制であると同時に、ネットなどを通じ農産物の直売も行っている。

⁴² 木の花ファミリーについては、主に木の花ファミリーHP <https://konohana-family.org/>による

当初20名でスタートした活動は、次第に賛同者も増えてくることで、活動領域の幅を広げ、農業以外では、現在、体験型宿泊施設の提供、精神疾患、ひきこもりなどを対象とした自然療法プログラムの提供、飲食カフェやマッサージの提供、教育プログラム「一ヶ月の真学校」の提供などを行っている。

活動領域も幅の広がりに対応する形で、2007年に名称を「木の花ファミリー」と改名し、現在はこの地で約100名近いメンバーが共同生活を営んでいる。

3-2-3. コレクティブハウス「かんかん森」

コレクティブハウス「かんかん森」は2003年に竣工した日本初のコハウジング型コミューナルリビングである。場所は東京都荒川区。JR山手線・京浜東北線「西日暮里駅」から徒歩10分前後の住宅地の一角にある。

最初のコハウジング型コミューナルリビングは1970年にデンマークで生まれたと第3章では紹介したが、ほぼ同時期にスウェーデンのイエテポリにも公共のコレクティブハウスが生まれている。呼称は異なるものの共同生活のコンセプト、実体的内容はほぼ同じである。こうしたスウェーデンでの動きを90年代に女性建築家のグループが導入を検討し始めた。こうした動きに有料老人ホームを運営する株式会社生活科学運営（現長谷工シニアホールディングス）が共鳴し、同社が荒川区に老人ホームを建設する際、その2~3階にコレクティブハウスを組み込むことを提案し、実現したのが「かんかん森」である。

一般的に欧米のコハウジングは、住民による共同所有、共同運営が基本原則であるが、「かんかん森」は賃貸型のコハウジングである。「か

んかん森」以降、日本にもいくつかのコハウジング型コミュニティリビングが誕生し、また次に紹介するシニア向けコハウジング型コミュニティリビング「COCO 湘南台」も同様の賃貸型である。これは日本特有の住宅事情（家屋の価格の高さ）などにも因るのでもあろうが、いまひとつ日本でコハウジング型コミュニティリビングが広がらない理由のひとつとしてはこうした所有の問題も関係しているかもしれない。

「かんかん森」の概要を簡単に紹介する。住宅戸数は全 28 戸。部屋タイプは 1 ルーム (25~40 m²) から 2DK タイプ (40 m²) までである。コモンスペースとして用意されているのは、リビングダイニングキッチン、ランドリールーム、ゲストルーム、共用洗面室などである。

居住者同士の運営方針については、居住者組合による年 1 回の総会と毎月の定例会を通じて協議がなされる。運営を担うための役割としてそれぞれに係とグループが割り当てられる。例えばそれは、ガーデニング、ハウスマンテナンス、コモンミール、対外コミュニケーションなどの役割である。

運営組織としては、居住者組合「森の風」と居住者有志による株式会社コレクティブハウスが日常の運営活動や入居者の募集活動などを司り、NPO コレクティブハウジング社が活動サポートを行っている。

NPO コレクティブハウジング社は、当初かんかん森を企画した女性建築家グループを母体として設立された NPO で、日本におけるコレクティブハウジングな暮らしの啓蒙、普及に努めている。現在、コレクティブハウジング社が関与したコハウジングは、「かんかん森」を始めとして、「コレクティブハウス巣鴨 (11 戸・2007 年)」「コレクティブハウス聖蹟 (20 戸・2009 年)」「コレクティブハウス元総社 commons (12 戸・2007 年)」「コレクティブハウス横浜 (10 戸・2007 年)」

「コレクティブハウス大泉学園（13戸・2010年）」「コレクティブハウス本町田（24戸・2020年）」などが開設されている。従来タイプの純粋なコレクティブハウスに加えて、近年では既存施設のコンバージョンも増えてきているようである。例えば、コレクティブハウス横浜はグループリビングをコレクティブハウスに転換したもので、コレクティブハウス元総社 commons は群馬県住宅供給公社が運営するサ高住、デイサービスとの併設となっている。柔軟なあり方が模索されつつあると言えるかも知れない。

3-2-4. COCO 湘南台

COCO 湘南台は、神奈川県藤沢市に1999年4月に開設された、10名の高齢者が自立して生活するコミュニティ・リビングである。COCO は、地域（Community）と協同（Cooperative）を意味し、テーマ「自立と共生」を表現している。

この施設を開発したのは藤沢市議会議員を24年間務めていた西条節子さん。彼女自身が右足関節に障害をもっていることもあり、活動テーマは主に福祉領域。海外の高齢者施設などを視察する中で、日本の多くの高齢者施設（例えば療養病院）では、高齢者の自立と尊厳が失われていることを実感した。

そこで、自らの手で「第三の人生を元気印で生きられる暮らし方を自分たちの手で開発したい」と考えるに至った。その経緯は、著書『10人10色の虹のマーチ 高齢者グループリビング COCO 湘南台』にまとめられている。⁴³

⁴³ 西条節子（2000）10人10色の虹のマーチ 高齢者グループリビング〔COCO 湘南台〕生活思想社

関心のある人々に声をかけ、当初16人のメンバーで「バリアフリー高齢者住宅研究会」を開催、マクロ的視点から、介護や医療、福祉との関係の築き方、自立と共生が両立する暮らし方等、さまざまな視点から議論を展開していった。その結果、研究会開始から半年後、基本思想のアウトラインが形作られてきた。

- ①自立と共生の高齢者住宅……ふれあう新しいコミュニティ
- ②共同運営と分担……共同出資と運営は自分たちで
- ③地域と生きる……地域のコミュニティとして役立つ
- ④健康に暮らす……地域の保健医療機関とのネットワーク
- ⑤元気印の発信基地……新しい暮らし方の発信、実験を進める

こうした基本理念に基づき、開発されたのがCOCO湘南台である。自立した人々の共同生活の場と言う視点に基づいた生活の場という視点においては、その精神はコレクティブハウス「かんかん森」と大きく変わるところはない。

個人の占有スペースは適度な快適性が確保できる程度（25.06㎡）とされ。その代わりに食堂、ゲストスペース、コモンスペースを拡充するというのが基本的な考え方である。

一方、これに「高齢者」という視点が加わることで、施設構成と共同生活の内容に差異が生じてくる。具体的に現れてくるのは、かんかん森では個別にあった風呂などの施設は、将来の介護の可能性も考え共用のみとなり、バリアフリー、エレベータ設置がなされると同時に、メンバーの共同運営であった共用部の掃除、朝夕の食事なども外部のワーカーズコレクティブに委託されている。また、近隣の医療関係機関、訪問介

護、介護支援センター、老健施設などとネットワーク関係を築くことが重要視されている。

運営組織としては NPO 組織、特定非営利法人 COCO 湘南による自立型の高齢者コミユナル・リビングが目指されている。

COCO 湘南台に加えて、2003 年神奈川県海老名市に「COCO ありま」、2006 年神奈川県藤沢市高倉に「COCO たかくら」が開設された。また居住施設ではなく、近隣高齢者の相談や各種イベントを開設する拠点として、COCO 湘南台の隣接地に「COCO みちしるべ」が 2008 年に開設されている。

3-2-5. 三角エコビレッジ SAIHATE

「三角エコビレッジ SAIHATE」は本論で紹介するコミユナルリビングの中で、おそらく最も近年に生まれたものである⁴⁴。SAIHATE は、熊本県宇城市、有明海に突き出した宇土半島の中ほどに位置するコミユナルリビングである。ここが誕生したのは、2011 年 11 月 11 日。同年に起きた東日本大震災を契機にこの地に疎開をしてきた家族などが中心となり生まれた。元々この地には「自然の里」という団体が活動を行っていたが、その地を譲り受けたものだ。

現在この地では、27 名（大人 17 人、子供 10 人）がともに生活している。共同生活のコンセプトは、「ルールもリーダーもなく、お好きにどうぞで始まる村づくり」というもので、1960 年代のスピリチュアル型コミユナルリビングのそれに近い。住民はそれぞれに自営の職

⁴⁴ 三角エコビレッジ SAIHATE については、主に HP <http://village.saihate.com/> の情報による

業を保有しているようで、大工、縫製作家、猟師、家具職人、映像クリエイター、ヨガインストラクターなどの「年齢もスキルもバラバラの個性豊かなクリエイター」で構成されていると言う。ホームページを見る限り、住民の多くは20～30代の若者が中心のようである。

3-3.日本におけるコミユナルリビングの特徴

以上、大正から現在に至る日本のコミユナルリビングの歴史を辿ってみた。「新しき村」「樺太共同農園」以外のコミユナルリビングの概要については、主に水津彦雄『日本のユートピア』（1971）に依ったが、同書ではこれ以外にも「わらび座（秋田）」「奥部落（沖縄）」「紫陽花邑（奈良）」などのコミユナルリビングが紹介されていた。「わらび座」は、秋田芸術村をベースに活動を続ける劇団として現在も活動を行っているものの、書籍に紹介されていた共同体的性格は現在では失われているようである。奥部落は沖縄本島の北、1905年に設立された国頭村に位置した相互扶助を目的とする最も古い共同売店であり、奥部落の存続は不明であるが同様の形の共同売店は現在も存続している。しかし、本論のテーマである（共同体的）生活は当初から行われていない。

「紫陽花邑」は、1945年に創始者矢追日聖が、天啓を得た独自の宗教観に基づき創設した信仰団体大倭教が、信者ととともに始めたコミユナルリビングであった。当初は、農業や軍手製造といった家内工業で生計を維持していたが、その後、地区の社会福祉協議会からの働きかけもあり救護施設の運営を開始。その後は福祉事業を拡大し、1956年に社会福祉法人としての認可も獲得。現在は、大倭教を中心に、各種収益事業（建築設計「大倭殖産株式会社」、印刷事業「大倭印刷株式会社」）と

社会福祉事業（救護施設「須加宮寮」、介護老人福祉施設「特別養護老人ホーム長曾根寮」、障害者支援施設「菅原園」、特定施設入居者生活介護ケアハウス「八重垣園」、特定施設入居者生活介護「ケアハウス茂毛路園」）を現在では展開している。当初は宗教活動を母体とするコミュニティリビングから次第に社会福祉事業に転換するパターンは、先に紹介した心境同人（心境荘苑）と同様である。

このように見てくると、日本のコミユナルリビングは、大きく3つのタイプに分けて捉えることができる。

ひとつは、「新しき村」「樺太共生農園」といった欧米の社会改良主義思想、トルストイ運動に影響を受けて開始されたコミユナルリビングであるが、これらは少数派に留まった。

そしてもうひとつは、一燈園、心境同人、ヤマギシ会、紫陽花邑などに共通する動きであるが、新たに宗教を開祖し、信仰を維持していくために共同生活（コミユナルリビング）の道を選択するというケースであり、新宗教のひとつの動きとして捉えることが可能かもしれない。これら組織に共通する基本姿勢として掲げられていたのが「無所有と共有制」であり、それら実践のために「共同生活」という生活方針が採用された。いずれの施設も寄付や援助に頼らない農業や軽工業による自活生活の基本方針であったことも、共同生活が選択された大きな理由のひとつであったろう。

また、1970年以降に新たに生まれた木の花ファミリーは新宗教というよりは、よりスピリチュアル的な要素を兼ね備えたコミユナルリビングとして捉えることが出来るだろう。三角エコビレッジ SAIHATE はスピリチュアル的な要素が見られるものの、おそらく宗教的バックボーンは

さほど無く、コ・ハウジングとスピリチュアルの中間的存在と言えるかも知れない。

そして3つめは、かんかん森やCOCO湘南台に見られるコ・ハウジング型タイプである。かんかん森は、スウェーデンのコハウジングをモデルとして誕生したものであるが、COCO湘南台については、高齢化社会における高齢者の住まいのあり方という日本特有の社会課題意識から生まれたコ・ハウジング・タイプと言えるかもしれない。

加えて、日本のコミュナルリビングに共通する特徴として掲げておきたいのは、社会福祉事業への接近である。心境同人（心境心苑）、紫陽花邑は、ともに宗教法人としての性格を現在も備えつつ、同時に社会福祉法人組織として障がい者、高齢者などの生活支援、就労支援を行う活動を行っている。日本において社会福祉事業が本格的に整備されるようになったのは社会福祉法の制定（昭和26年）以降のことであるが、これら施設はそうした社会福祉事業拡充のための受け皿機能を果たしたと言えるかもしれない。また、ヤマギシ会については、公的社会福祉事業と直接の関連はないものの、ヤマギシ学園など子供教育の実践を通じて、引きこもり児童、問題児童の引き受けを行っており、こうした社会福祉事業とコミュナル・リビングの接近に見られる包摂的性格は、欧米における（個人の）相互に自立を前提とする平等や共同性を重視したコミュナル・リビングとは、多少異なる性格を備えていると言えるかもしれない。こうした福祉活動への接近は1970年以降から現在に至る日本のコミュナルリビングにおいても「共働学舎」などにおいても強く認めることが出来る。

以上のような形で日本におけるコミュナルリビングの系譜を辿ってみた。このように見てくると欧米におけるコミュナルリビングのタイプと

はいささか異なる「ケア型コミュニアリビング」とでも言ってもいいタイプが存在することに気がつく。

おそらくこのケア型コミュニアリビングのタイプは、欧米では古くから宗教による福祉活動のひとつとして広く行われているものであろう。共働学舎の項で紹介したドイツのベテルなどがその典型的事例である。しかし日本では、そうした活動は寺社や教会の一部では認められるものの、それらの多くは（おそらく）心境同人の動きと同様、社会福祉法人化され公的福祉事業の枠組みに組み込まれていったのではないだろうか。

しかし、こうした公的社会福祉事業の流れとは別に、共働学舎やCOCO 湘南台など障がい者や高齢者に関するコミュニアリビングのタイプが生まれているということは何を意味するだろうか。ここでは、それを既存の福祉事業の枠に囚われない、より自律的な福祉生活のあり方を求めようとする人々の動きであると捉えてみたい。こうした動きが今後日本の中で、継続的に続くか、もしくは広がる可能性があるのかについては不明であるが、高齢化が進む日本社会の中におけるひとつの可能性であるとも考えられる。

第4章 考察とまとめ

本論では、第1章から第3章を通じて、欧米及び日本における実践型
コミュニアリビングの歴史的系譜を辿ってきた。さまざまな形で立ち現
れてきたコミュニアリビングの諸類型の歴史から学び取れる現代的意義
は何かを最後に考察してみたい。かつての、家族・コミュニティ＝ゲマ
インシャフト（第1）、行政・自治体＝ゲゼルシャフト（第2）の機能
がともに低下した現在、コミュニアリビングを新しい生活スタイル（第
3）のひとつとして改めて捉え、そこから読み取れる可能性について考
えてみたい。

4-1. コミュニアリビングの諸類型

本論で捉えた各種コミュニアリビングのタイプを再度整理しておく。
本論では、欧米における時代の変遷とともに登場したさまざまなコミュ
ニアリビングのタイプを宗教型、社会改良主義型、キブツ型、スピリチ
ュアル型、コ・ハウジング型、リタイアメント型の6タイプに分類し
た。また日本のコミュニアリビングの変遷から、これらにもうひとつの
タイプとしてケア型コミュニアリビングを加えた。以上7タイプのコ
ミュニアリビングを基礎としながら改めてその共通点と差異に関して整
理してみたい。

4-2. 時代区分から見たコミュニアリビング

表 6 時代区分によるコミュニアルリビングの整理

時代	近世・前近代社会	近代（初期）	近代（中期）	近代（後期）
年代	18世紀	19世紀半ば～20世紀初頭	20世紀半ば	20世紀後半～現在
コミュニアルリビング・タイプ	宗教型 コミュニアルリビング	社会改良主義型 コミュニアルリビング	スピリチュアル型 コミュニアルリビング	コハウジング型 コミュニアルリビング
		キブツ型 コミュニアルリビング	ケア型 コミュニアルリビング	リタイアメント型 コミュニアルリビング
時代背景	封建主義・宗教社会	資本主義	経済成長によるゆがみ	コミュニティ・家族の崩壊
	信仰迫害	資本家・労働者格差	反体制志向	社会保障のゆらぎ

コミュニアルリビングの歴史的変遷について整理したのが表6である。宗教型コミュニアルリビングは、宗教的自由を求め欧州各地から新天地アメリカに移住した人々によるものであった。彼らが求めたのは彼らの信仰の自由の実現であり、そのために彼らは、自立した共同生活のあり方を探求した。

ロバート・オウエンやフーリエなどを始祖とする「社会改良主義型コミュニアルリビング」は、19世紀半ば、当時表面化していた資本家と労働者間格差を解消することを目的に考えだされたものだった。キブツ型コミュニアルリビングもこの延長線上に存在する。

1960年以降、新たに生まれたスピリチュアル型コミュニアルリビングは、行き過ぎた資本主義社会に対する反動とでもいうべきものであり、物質世界ではなく精神世界を重視した共同生活が求められた。

1970年頃、北欧を起点に生活の一部を共有するコ・ハウジング型コミュニアルリビングや、米国でCCRC(Continuing Care Retirement Community)と呼ばれる高齢者のリタイアメント型コミュニアルリビングが誕生したが、これらは、宗教的、イデオロギー的思想性は薄れ、生活

の一部の共同化、共助活動が中心である。コミュニティにおける社会関係資本の強化や相互援助、生活ケアといった、ゲマインシャフト的価値の回復が目的となっている。

このようにコミュニアリビングの歴史的流れを整理してみると、かつては精神・宗教を基盤として共同生活の内容が築かれていたのに対して、次第に精神・宗教的基盤は薄れ、実質的生活基盤をベースに共同生活の内容が志向されるように変化してきたと捉えることが出来るだろう。

4-3. コミュニアリビングに共通する思想① ー主流となる価値集団からの離脱とオルタナティブな価値集団への帰属

さまざまな時代背景にもとづき各種コミュニアリビングが生まれたわけだが、いずれにも共通するのは、それぞれの時代における「主流となる価値集団からの離脱」と「オルタナティブな価値集団への帰属」として捉えることができる。

本論で取り上げたコミュニアリビングに集った人々は、なぜそれまで属していた既存共同体（地域コミュニティや家族）を捨て、新たな共同体に属することを決断したのか。それは一言でいえば、自分が属していた共同体のあり方と自己のアイデンティティに何らかの違和感や葛藤を抱えていたからであろう。違和感は、既存共同体からの迫害（信仰上の理由など）といった受動的理由に基づくもあれば、カリスマが打ち立てた新共同体のビジョンに賛同するという積極的で主体的な理由に基づく場合もあった。いずれにしても、既存共同体からの離脱という意思を持

つ人々が生まれ、新しい共同体が生まれるための場所と周辺環境が用意されたということが重要であった。

離脱の理由はさまざまである。宗教型の場合は母国における信仰迫害が契機となり、社会改良主義型は資本家階級と労働者階級の階級格差の解消が理由となった。キブツ型はそれにシオニズムというユダヤ人特有の民族問題が時代背景として加わった。スピリチュアル型は行き過ぎた資本化社会と管理社会に対する若者世代の異議申し立てとして、コハウジング型は村落共同体型社会から都市型社会への移行に伴う社会関係資本の希薄化に対する一種の異議申し立てとして受け止めることができる。

このように見ると、それぞれの時代における支配的管理体制に対する無意識的異議申し立てがコミユナルリビングであったとも言える。それ故にコミユナルリビングは体制側から排斥すべき存在として見られることもしばしばであったのである。

最初のコミユナルリビングが誕生したのが、近世から近代に移り変わる18世紀であったことも興味深い事実である。この時代、新大陸アメリカの発見と大量移民という一大ムーブメントを背景に、それまで欧州を大きく支配していた封建制度的価値観や宗教制度から脱出したいと考える人々が生まれた。こうした人々を力強く後押ししたのが第2章で考察したルソーを始めとする封建社会からの離脱を促す市民主権意識の芽生えであった。自らの手により自分たちの望む社会を築き上げていこうとする主体的意志を持つ人々の登場によりコミユナルリビングは登場した。

また、オルタナティブな価値集団を継続維持するためには、コミューナルリビング自身が自立可能な生活手段を獲得する必要がある。宗教型においては、主に農業や林業、牧畜、衣類製造がその役割を果たし、その後の社会改良主義型では同じく農業や牧畜に加えて印刷やホテル経営なども試みられた。現在でもコミューナルリビングとして継続成立しているキブツ型は先端技術開発の力なども備え、それが最も上手くいっているケースと言えるだろう。

しかし、近年のケア型、コハウジング型、シニア型といったコミューナルリビング・タイプでは自立志向は薄れてきているが、それは、共通価値観（オルタナティブな価値観）を共有するための「自立」という条件が、以前ほど必要とされなくなったからであろう。

4-4. コミュナルリビングに共通する思想② 一平等と共同

コミューナルリビングの歴史的変遷において通底するもうひとつの重要な共通項目として挙げられるのが、「平等」と「共同」という価値観である。

コミューナルリビングの諸相を通じて、強弱はあれどもコミュニティの属する人々間における平等を実現しようとする思想、もしくは格差の是正を通じた平等化の考えを認めることができる。

そもそも平等という概念は、マルクスの語る唯物史観の最も初期段階である狩猟採集社会の原始共産制、プラトンやアリストテレスの活躍したギリシア民主制においても市民における平等（但し、女性、外国人、奴隷は除く）概念は存在していた。しかしその後、神の下での平等は観念としては存在したものの、実際には身分階級による格差が、中世にお

ける封建主義時代を通じて長く存在した。第2章で検討したとおり、社会改良主義型コミユナルリビングの誕生は、産業資本家と労働者の格差是正、労働者間の平等化を図ろうとしたものであったし、社会改良主義型から発展した社会主義、共産主義は、そもそもは労働者の完全な平等社会を目指そうとするものであった。キブツ型、コ・ハウジング型、ケア型においても、共同体内部メンバーの相互関係を指導する立場、指導される立場といったかたちで縛るのではなく、何らかの形でひとりひとりの意見を尊重しようとする平等性の思想を見出すことができる。

また、もうひとつの共同は、そもそもの語義は「二人以上でいっしょに行うこと。また、二人以上が同等の資格で結びつくこと」（岩波 国語辞典 第七版 新版）であり、この語句も先の平等の概念と同様に社会主義、共産主義と相性の良い言葉である。

共同によって、人々が得られる価値とは一体何だろうか。それは、「共同による合理的価値」と「共同による精神的価値」に大きく分けられるだろう。

「共同による合理的価値」とは、人々が共に集い作業を行うことで、無駄が排除され、その結果、効率化が図られるという価値である。人々が共通の思想を保有し、共通の労働に従事し、同一の食事を取り、共に暮らすことによって得られるさまざまな非効率性や無駄の排除。こうした概念の芽生えは、マックス・ヴェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（1905-05）で西洋近代の資本主義を発展させた原動力は、カルヴァニズムにおける宗教倫理から生み出された世俗内禁欲と生活合理化であったという指摘とも時代的には通底している。

もうひとつの「共同による精神的価値」とは、同じ価値観を持つ人々が共に暮らすことによって得られる「安全・安心」や「精神的な安定」を意味する。また、共に住まうことにより、お互いの出来ることや出来ないことを相互に補完し合う共助の関係の重視といった事項も共同による精神的価値に含まれるだろう。

コミュニアリビング（共同生活）の別表現として、「シェルター」「コクーン」という語句が用いられることもあるが、オルタナティブな価値観集団への帰属はすなわち精神の安寧を得るためでもあったとも言える。

「共同による合理的価値」と「共同による精神的価値」。前者は、これを突き詰めれば、効率性を求めた分業システムや近代経営による生産性向上など、資本主義的な効率性の追求と同根であると言える。一方で、後者の「共同による精神的価値」は、ゲマインシャフト的価値と言い換えることができるかもしれない。本論の冒頭に述べた現代の多くに失われてしまったゲマインシャフトの持つ価値がここには温存されているということだろう。このように考えると、「共同による合理的価値」と「共同による精神的価値」の両者は、共同という同じ名称の元で、近代化（＝合理的価値）と前近代化（＝精神的価値）という相反する価値を同時に求めようとしていたことが分かる。それも、コミュニアリビングが生まれた時期が、前近代と近代の狭間であったという事実と関係しているのかもしれない。こうした合理的価値と精神的価値を同時に追求めようとしたのが、コミュニアリビングの特徴であるとも言えるだろう。

4－5.コミュニアリビングに共通する思想③ 一禁欲性

また、同じくヴェーバーが指摘した「宗教的倫理から導き出された世俗内禁欲」もコミュニアルリビングに共通する要素として指摘できるだろう。多くのコミュニアルリビングには、何らかの形で禁欲性の香りが漂っている。宗教型コミュニアルリビングは当然のことながら、それ以外の社会改良主義型やスピリチュアル型、コハウジング型にも、少なからずそのような精神性を感じ取ることが出来る。これは、言ってみれば、人々が集団生活を行う上での生活倫理の重視の結果と言えるかもしれない。倫理とは、「人間生活の秩序つまり人倫の中で踏み行うべき規範の筋道（岩波 国語辞典 第七版 新版）」であるが、生活に禁欲性を貫くことが、「正しき（善）人の道」であるという多くの宗教が持つ禁欲思想の反映と捉えることが出来るだろう。

4-6. コミュナルリビング間で異なる要素

表 7 コミュナルリビングの差異要素

	宗教型	社会改良主義型	キブツ型	スピリチュアル型	コ・ハウジング型	リタイアメント型	ケア型
共通の思想・宗教	○	○	○	○	×	×	△
私有財産放棄/共有	○	○	△	△	×	×	×
共同労働	○	○	○	△	×	×	△
共同生活	○	○	○	△	△	△	△

このように共通要素がある一方で、コミュニアルリビングは、同じ共同生活とはいっても、その共同内容の実態はタイプにより異なる要素も多分にある。それらを項目別に整理してみたものが表 7 である。

最初に挙げられるのは、思想的な共通背景（「共通の思想・宗教」）である。コミュニアルリビングは、主流価値集団からの脱却とオル

タナティブな価値集団への帰属であると述べたが、背景となる思想信条の強弱はそれぞれのタイプによって大分異なる。宗教型、社会改良主義型、キブツ型、スピリチュアル型は、宗教信条やイデオロギーに対する共通性により、強固な思想的同一基盤をメンバー間で保持していると言える。一方で、コ・ハウジング型、リタイアメント型については、そのような強い思想信条を見出すことはできない。もちろん、ゆるやかな共同生活に対する理念的観念を見出すことはできるものの、皆で運命共同体的意識を共有するほどの強固なものではない。ケア型については、ケア型のいくつかは宗教型からの転換をベースとしたもの（例えば心境同人のケース）もあり、なんらかの宗教信条をバックボーンとするものもある。

「私有財産放棄/共有」も、思想的背景が強固であればあるほど、重視される傾向が強い。宗教型、社会改良主義型、キブツ型の多くは、参加メンバーに対して集団に帰属する際に財産の放棄と集団への提供が義務づけられ、結果としてメンバー間の平等が担保された。これは、集団の経済的自立を保持するための手段でもあった。しかし、これについては、キブツ型においても、一部私有制を認める動きに転換していったように、時代の流れとともに次第にゆるやかになる傾向が窺える。1970年前後以降に生まれたコ・ハウジング型、リタイアメント型などにはこうした動きは一切見られず、私有財産制が基本である。

「共同の労働」も、上記と同様に宗教型、社会改良主義型、キブツ型では比較的強く、コ・ハウジング型、リタイアメント型では見られない。宗教型、社会改良主義型、キブツ型では、コミユナルリビングそのものの経済的自立が目標とされたから、そのためには参加メンバーの労働の量・質の管理が重要となった。コ・ハウジング型、リタイアメント

型では、参加する個人（世帯）での経済的自立が参加の前提となっている。

「共同生活」は、唯一これらコミユナルリビングの諸タイプで共通項目として挙げられるものである。生活の共同要素は、居住、炊事、食事、洗濯、睡眠、教育、娯楽、団らんなどに分類できる。それら共同の強弱は、上記と同様に宗教型、社会改良主義型、キブツ型では比較的多く、コ・ハウジング型、リタイアメント型は少ないが、全タイプに共通しているのは食に関わる部分であろう。このように見ると、共に食卓を囲み食事を取り語りあうことで相互関係の絆を深めるということが、共同の基本原型であるということが理解出来る。

4-7. コミュナルリビングの体系整理

以上の共通要素、異なる要素をまとめたのが図3である。まず全体に共通する通底要素として表されるのが、下部に記された「平等」「共同」「禁欲」という3つの要素である。こうした思想をベースとして、個々の時代における「主流である価値集団から脱出」し、「自立した経済生活を獲得」することで、「オルタナティブな価値観集団へ帰属」しようとしたのが、コミユナルリビングであったと整理することが出来る。

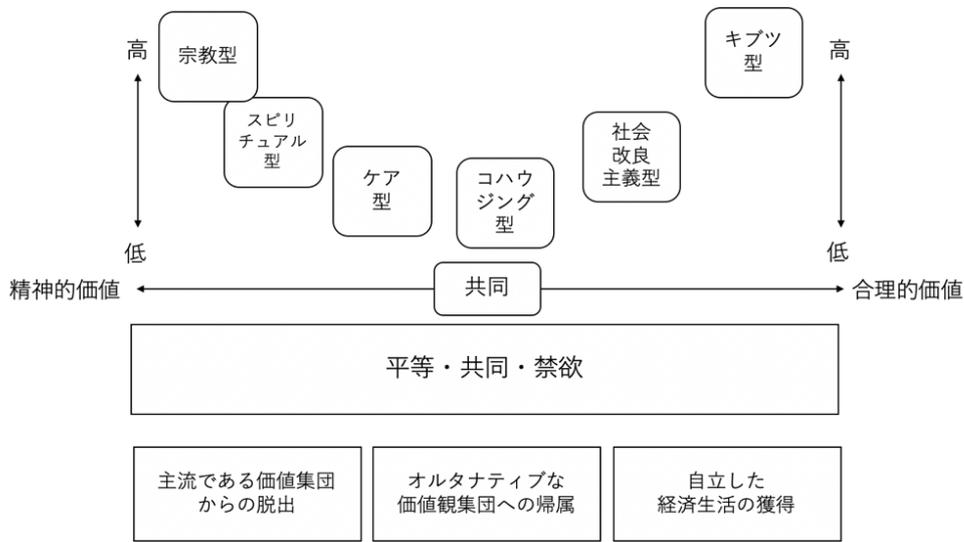
また、「共同」することで、人々が得ることの出来る価値としては、大きく「合理的価値」と「精神的価値」に大別することができる。図表には、この2つの価値を両軸に配置し、コミユナルリビング・タイプがどちらの価値を重視しているかに応じプロットしてみた。最も合理的価値を重視したのは、キブツ型や社会改良主義型コミユナルリビング

であろう。おそらくこのベクトルの極北に位置づけられるのは、ユートピア社会主義を発展させた共産主義であろう。合理的価値とは、コミューナルリビングのメンバーが、平等で自立した経済生活を獲得するために、生産合理性を目指したものであった。

一方で、共同による「精神的価値」を重視したのは、宗教型、スプチュアル型、ケア型である。こちらは、生産の合理性を通じた平等の獲得が目的ではなく、神の下での平等の実現と共同による精神の安寧が目的であると言えよう。

コハウジング型は、両者の中間に位置するタイプとして位置づけられる。コハウジング型が目的とするのは、あくまで生活の一部の共同化によるゲマインシャフトの回復であり、それ以上の社会改良主義型のような強いイデオロギー主導でもなければ、宗教理念に基づく神の下での平等が目的とされたものでもない。あくまで、ここに集うことの意味はコミュニティにおける社会関係資本の強化や相互援助、生活ケアといった、ゲマインシャフト的価値の回復が中心テーマとなっている。共同化されるべき要素は労働や消費局面では求められず、食事や交流といった機会を通じて、相互人間関係の絆を作ることが求められるのみである。

図 3 コミュナルリビングの体系



4-8. コミュナルリビングの現代的意義

本論の最後にコミュニアルリビングの現代的意義について考えてみたい。

まず触れておきたいのが、リベラリズム、保守主義に代わる第3の思想として近年、注目されている「コミュニタリアニズム（共同体主義）」とコミュニアルリビングの関係についてである。

コミュニタリアニズムを唱える学識者は、マイケル・サンデル、アミタイ・エツィオーネ、アラスデア・マッキンタイアなどがいるが、そのベースにあるのは、「人間のアイデンティティは、さまざまな種類の構成的な共同体（または社会関係）によって大きく形成されており、人間の本質についてのこのような概念は、政策や制度だけでなく、私たちの道徳的、政治的な判断にも情報を与えるべきである」（Stanford

Encyclopedia of Philosophy) という、共同性と倫理性・道徳性を重視した考え方である。

コミュニタリアニズム的思想が浮上した背景として、小林正弥(2005)は次のように説明している。すなわち、「共産主義・社会主義の崩壊前後に、市場原理主義(リバタリアニズム-ネオ・リベラリズム)や利己主義的な個人主義が隆盛となったこと。その結果、貧富の格差、バブル経済、環境問題など市場経済の問題点や、道徳の衰退・犯罪の増加、少子高齢化・人間の希薄化などの社会的問題も、深刻なものとして浮上してきた。そこで、このような問題に対して、倫理性(モラル・美德)と共同性(コミュニタリー)の必要性を主張して、人々の間のつながりを再生させようとしたのが、コミュニタリアニズムとすることができる。」⁴⁵

共産・社会主義の崩壊と資本主義がネオ・リベラリズム的変節を遂げる中で、再度かつての前近代社会や初期の共産・社会主義(ユートピア型社会主義)が保有し、目指していたゲマインシャフト的社会を再度取り戻そうという志向のベクトルと同様の共通点をここに見出すことができるのではないだろうか。その意味で、本論で取り上げた歴史的変遷を遂げつつ現在まで続いたコミユナルリビングの存在とコミュニタリアニズムは時代的に通底していると言えるのではないか。

4-9. コミュナルリビングの持つ課題

⁴⁵ 小林正弥「解説-エツィオーニのコミュニタリアニズム」、エミタイ・エツィオーニ『ネクスト善き社会への道』小林正弥監訳 麗澤大学出版会 2005

一方、コミユナルリビングの現代における限界と課題についても触れておきたい。

本章の冒頭で、コミユナルリビングに共通する要素として、「主流となる価値集団からの脱出」と「オルタナティブ（別）な価値集団への帰属」という点を指摘した。つまり、コミユナルリビングは常に時代の非主流派なのであった。非主流派としての意識が、来歴の異なる人々の結束意識を深め、かつ共同生活という血縁や家族とは異なる生活スタイルを選択させたのであるとするならば、現代においても、そこに踏みとどまっている限り、やはりコミユナルリビングはオルタナティブな存在のままである。

ジグムント・バウマン（2001）は、そもそもコミュニティは、本来人々が、「自然」で「暗黙」のうちに共有できる夢想の存在にすぎないと語っている⁴⁶。そして、コミュニティを人為的に作ろうとした途端に、それはもろく、傷つきやすく、永遠に警戒、防備、防衛を要するものに留まるだろうと語る。そうしたコミュニティがサステナビリティを得るためには、何が必要となるのだろうか。

現代における主流であるコミユナルリビングのタイプは、コ・ハウジング型とリタイアメント型であろう。コ・ハウジング型はコモンスペースを通じた生活の一部を共同化する、リタイアメント型は高齢期特有の加齢に伴う日常生活上の困難性を補完することを目的としたコミユナルリビングである。生活を送る上で、より日常的に他人との交流を深めることで精神的な豊かさを獲得したい。年を重ねることによる日常生活の困難を解消したい。こうした要望には、コ・ハウジング型、リタイアメ

⁴⁶ Zygmunt Bauman(2001) Community seeking safety in an insecure world(ジグムント・バウマン 奥井智之訳 コミュニティ 安全と自由の戦場 ちくま学芸文庫)

ント型コミユナルリビングのタイプは十分に応えることの出来る機能を有している。

しかし、現代社会における人々に見られる生活の困難性はそれだけに留まらない。貧富の格差、道徳の衰退、単身世帯の増加、少子高齢化、人間関係の希薄化といった社会問題に対して、コミユナルリビングは応えることは果たして可能であろうか。

おそらくそのために必要となるのは、コミユナルリビングがオルタナティブな存在に留まるのではなく、より一般的で普遍的な存在になるための価値の転換であろう。言い換えれば、多くの人が賛同してくれる社会課題解決のための一般的共通価値を持つことが、コミユナルリビングがオルタナティブな存在から主流になり得るカギとなる。だが、それは一体何であろうか。

4 - 1 0 .食と宗教倫理

本論では、最後にそのためのキーワードとして、「食」と「宗教倫理」という2つのキーワードを掲げておきたい。

各コミユナルリビングの歴史を通じ、人々が共同生活を送る上で必ず共同化される生活行動は何かと問われれば、それはまず「食事」であろう。毎日の食事を摂取することは、人が生命を保つ上においても最低限必要な作業である。しかし、だれか人と共に食事を取るということは、単に栄養を補給する以上の意味を与える。多くのコミユナルリビングで食事は共に行われたが、それは単に食事作業の共同化による合理的価値のみが追求されたのではなく、共に食事を取ることによって交わす会話やコミュニケーションを通じた精神的価値もそこにはあったのではないか。宗

教型コミユナルリビングにおいても、しばしば食事はコミュニティ・キッチンで提供され（ナザレ派コミュニティ）、社会改良主義型においても、共同食堂は共同生活施設の中央部に配置された（ラリタン・ベイ・ユニオン）。過去のコミユナルリビングのタイプに比べ、多くの共同要素がそぎ落とされたコ・ハウジング型においてもコモンスペースとしてのダイニング・キッチンは、コミユナルリビングを構成する上で欠かさざる施設として配置されている。このように見ると、人々が共同生活を営む上において食を共にするという行為は、人と人との紐帯を強める上において必要欠くべからざるものであると言えるだろう。「同じ釜の飯を食う」ということわざに表現されるとおり、共食は同じ共同体に属する者が、同じものを食べることで、その共同体への帰属意識を強めることに他ならない。

そうした意味では、コミユナルリビングを維持する上での最小公倍数的機能と言えるこの共に食事を取るという行為を、重要視する視点が、コミユナルリビングをオルタナティブな存在から普遍性を獲得していくための第一歩になると考えられる。例えば、近年のコミュニティに「子ども食堂」を設ける試みなども、食を通じて地域の社会関係資本を回復させようとする動きとして捉えることが出来るのではないか。

そして、もうひとつのキーワードは「宗教倫理性」である。本論では数多くのコミユナルリビングを取り上げたが、多くは、永続性を獲得すること適わず、短命のうちにその活動を終えている。数多くのコミユナルリビングの持続が適わなかったということは、すなわち、同じ志を持ちながらも、異なる来歴を持つ人々が共に暮らしていくこと自体の根本的な困難さを示している。

そうした中で、紆余曲折を得ながら現在まで存続しているコミュニナルリビング・タイプが、いくつかの宗教型コミュニナルリビングとスピリチュアル型コミュニナルリビングである。最も著名なものは、250年の歴史を持つシェーカー・コミュニティだが、それ以外にもフッター派(宗教型)、アナンダ・コーポラティブ・ビレッジ(スピリチュアル型)、ラマ・ファウンデーション(同)などは長年その活動を継続している。日本でも、一燈園、心境同人、幸福山岸会など独自の信仰を元に設立されたコミュニナルリビングは長い歴史を持つ。このように考えると、コミュニナルリビングの永続性を考えるためのヒントは、やはり宗教倫理性の中に求められるのではないか。トマス・モアが夢想したユートピアの中にもある「節度のある質素な生活」「競争主義の排除」といったある種の禁欲性が、組織が永続性を得るためのポイントであったとすると、現代においてはそうした宗教的イデオロギーを除いた、もしくは薄めた上で、禁欲性を集団が保有するための新たな思想性を獲得することが必要であると言えるだろう。

参考文献一覧

- 上野千鶴子「家族の臨界 ―ケアの分配公正をめぐる―」2008,社会学研究,20(1):28-37
- 大塚久雄(1955) 共同体の基礎理論 岩波書店
- 奥井智之(1990) 60冊の書物による現代社会論 五つの思想の系譜 中公新書 159
- 小野二郎(1969) ユートピアの論理 晶文社
- 神島裕子(2018) 正義とは何か 現代政治哲学の6つの視点 中公新書 2505
- 川端香男里(1993) ユートピアの幻想 講談社学術文庫 1094

- NPO 法人共働学舎（2015）「共働学舎の構想」第14版
- 久保田裕之（2012）「世帯概念の再編—非家族世帯と『家計の共同』をめぐって」
『年報人間科学』33:27-42.
- 小林正弥「解説—エツィオーニのコミュニタリアズム」、エミタイ・エツィオーニ
『ネクスト 善き社会への道』小林正弥監訳 麗澤大学出版会 2005
- 杉原良枝（1962）心境部落 村八分から共同生活 25年 春秋社
- 五島茂、坂本慶一（1975）「ユートピア社会主義の思想家たち」『世界の名著続8
オウエン サン・シモン フーリエ』中央公論社
- 西條節子（2000）10人10色の虹のマーチ 高齢者グループリビング〔COCO
湘南台〕生活思想社
- 宮瀬陸夫（1962）ロバート・オウエン：人と思想 誠信書房
- 水津彦雄（1971）日本のユートピア 太平出版社
- 村岡到（2013）ユートピアの模索 ヤマギシ会の到達点 ログス
- 武者小路実篤記念館（2018）新しき村の100年 調布市武者小路実篤記念館
- 森谷とみ（1980）回想・新しき村 大きなタネの会
- 安永壽延（1971）日本のユートピア思想 コミュニオンへの志向 法政大学出版局
- ユートピアの会編（1973）日本ユートピア学事始 河出書房新社
- 和田春樹（1992）歴史としての社会主義 岩波新書 239
- ロバート・オウエン「社会制度論」『世界の名著』中央公論社
- ルソー『社会契約論』岩波書店、桑原武夫、前川貞治郎訳
- Amitai Etzioni（2001）*Next: The Road to the Good Society*, New York: Basic Books
（アミタイ・エツィオーニ 善き社会への道 小林正弥監訳 公共哲学センター訳
麗澤大学出版会）
- Amia Leiblich（1981）*Kibbutz makom* Pantheon Books（アミア・リブリッヒ キブ
ツ その素顔 ミルトス）

- David Christie - Murray (1976) *A history of heresy* (D.クリスティ=マレイ 野村美紀子訳 異端の歴史 教文館)
- Friedrich Engels (1883) *Die entwicklung des sozialismus von der utopia zur wissenschaft* (エンゲルス 大内兵衛訳 空想より科学へ 岩波書店)
- Gregory Claeys (2011) *Serching for utopia the history of an idea* (グレゴリー・グレイス 孝之監訳 小畑拓也訳 ユートピアの歴史 東洋書林)
- Jean Servier (1966) *Histoire de l'utopie* Editions Gallimard (ジャン・セルヴィエ 朝倉剛・篠田浩一郎訳 ユートピアの歴史 筑摩叢書 186)
- Jonathan Beecher (1998) *Charles fourier the visionary and his world* (ジョナサン・ビーチャー 福島知己訳 シャルル・フーリエ伝 幻視者とその世界 作品社)
- Kythryn McCamant and Charrles durrett (2011) *Creating cohousing building susutainable communities* ,new society publisers
- Thomas More (1556) *Utopia* (トマス・モア 平井正穂訳 ユートピア 岩波書店)
- Marie Louise Berneri (1950) *Journey through Utopia* (マリー・L・ベルネリ 手塚宏一・広河隆一訳 ユートピアの思想史 太平出版界)
- Tonnies Ferdinand (1887) *Gemeinschaft und gesellschft* (フェルナンド・テンニエス 杉之原寿一訳 ゲマインシャフトとゲゼルシャフト 純粹社会学の基本概念 岩波文庫)
- Lewis Mumford (1922) *The story of utopias* Boni & Liveright,Inc. (ルイス・マンフォード 関裕三郎訳新版 ユートピアの系譜 新泉社)
- Nancy Green (1994) *L'odysee emigrants et ils peupleerent l'Amerique* (ナンシー・グリーン 明石紀雄監修 村上伸子訳 多民族の国アメリカ ー移民たちの歴史 創元社)
- Robert S. Fogarty (1980) *Dictionary of american communal and utopian*

history, Greenwood press

イスラエル・リング (1974) 草刈善造他訳 キブツの挑戦 一病める現代文明への回答 大成出版社